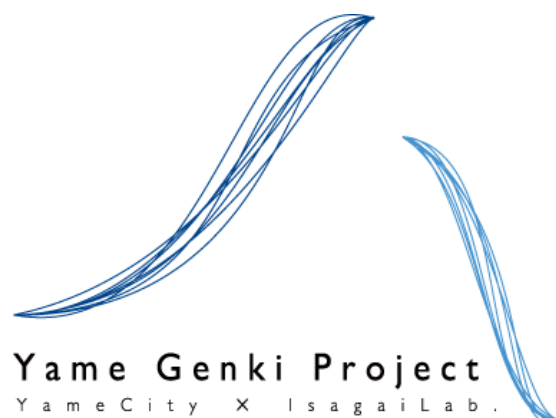




八女市元気プロジェクト ーコミュニティFMを活用した地域活性化 2010年度提言報告書

慶應義塾大学飯盛義徳研究室
(地域情報化研究コンソーシアム)

目次

1. プロジェクト概要

- 1-1. プロジェクト概要・目的
- 1-2. プロジェクト推進イメージ
- 1-3. プロジェクトメンバー

2. 2010年度プロジェクト内容

2-1. 合宿形式による地域資源再発見プログラム

- 2-1-1. 合宿前勉強会
 - 2-1-1-1. 各旧市町村のキャッチフレーズ作成
 - 2-1-1-2. キャッチフレーズ作成から導出された地域の特徴
- 2-1-2. 合宿の内容
 - 2-1-2-1. 1日目: 視察、表敬訪問
 - 2-1-2-2. 2日目: 視察、意見交換会
 - 2-1-2-3. 3日目: 提言発表会
- 2-1-3. 提言発表内容(概要)
- 2-1-4. アンケート調査

2-2. 学生プロジェクトチームの結成

- 2-2-1. 学生プロジェクトチームの活動1(研究計画発表)
- 2-2-2. 学生プロジェクトチームの活動2(ClipCM講習会参加)
- 2-2-3. 各旧市町村視察
 - 2-2-3-1. 各旧市町村視察(星野)
 - 2-2-3-2. 各旧市町村視察(立花)
 - 2-2-3-3. 各旧市町村視察(黒木)
 - 2-2-3-4. 各旧市町村視察(上陽)
 - 2-2-3-5. 各旧市町村視察(八女)
 - 2-2-3-6. 各旧市町村視察(矢部)

2-3. 八女市元気ワークショップ

- 2-3-1. 疑似体験まちづくりディスカッション
- 2-3-2. 魅力発見グループワーク(楽生くらぶ)
 - 2-3-2-1. 楽生くらぶアンケート調査
 - 2-3-2-2. 楽生くらぶを通じた成果と課題の抽出

3. 2010年度プロジェクト成果

- 3-1. 2010年度プロジェクトの成果1
- 3-2. 2010年度プロジェクトの成果2
- 3-3. メディア掲載

4. 2011年度以降のプロジェクト提案

- 4-1. 2011年度の方方向性
- 4-2. 情報技術を活用した意識共有方法(案)
- 4-3. 2011年度の目標
- 4-4. 2011年度の体制

1

プロジェクト概要

1-1. プロジェクト概要・目的

本研究プロジェクトは、福岡県の「個性ある地域づくり推進事業費補助金(ITを活用した中山間地域活性化事業)」の支援を受けている八女市、九州テレコム振興センター、慶應義塾大学飯盛義徳研究室(地域情報化研究コンソーシアム)との連携により推進される。

福岡県八女市は2006年10月1日に上陽町、2010年2月1日に黒木町、立花町、星野村、矢部村を合併し、今後、新八女市としての魅力を打ち出し、課題を解決していくことが希求されている。中でも、コミュニティFMや情報技術を活用した地域活性化が課題の一つであり、本プロジェクトは、そのための解決策を実践と研究の両輪を回すことにより取り組むものである。

情報技術を活用して地域活性化を実現するためには、地域の資源を見出し、発信し、地域を盛り上げていくことのできる人材がいかに活躍できるかにかかっているといっても過言ではない。また、地域活性化に関心のある人々が集まり、切磋琢磨できるコミュニティ機能も不可欠である。

そこで、本プロジェクトでは、コミュニティFM(2012年開局予定)に向け、八女市における人と人とのつながりを形成し、新しい活動などが芽生えるようなプラットフォームを設計することを目指す。

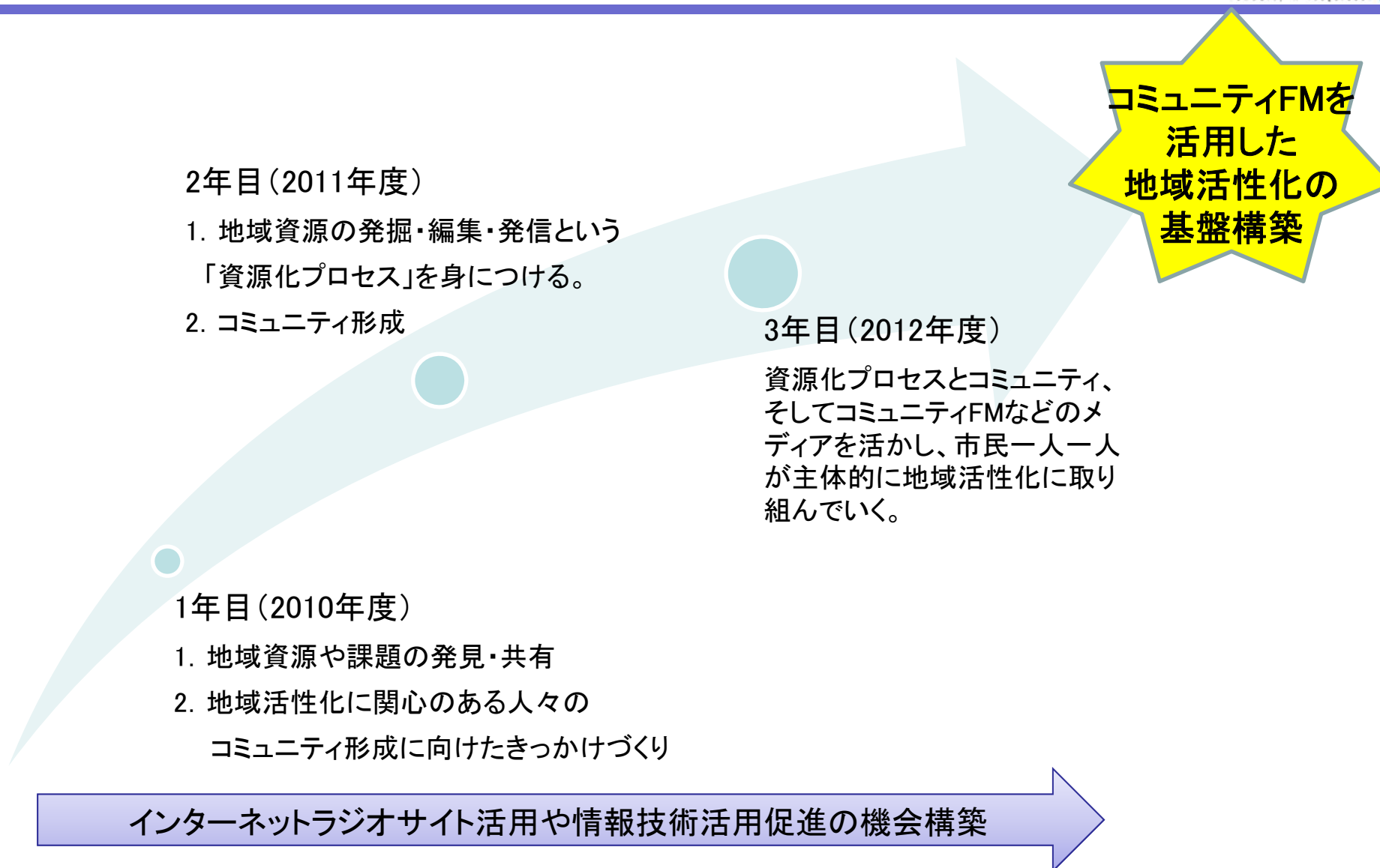
具体的には、まず、コミュニティFM、情報インフラの整備だけにとどまらず、地域の人々の協働によって、資源を再確認し、それを発掘、編集していくプロセスが起こるような仕組みをつくる。このような活動の中で、新しいつながりが形成され、地域をどのように元気にしていくのかの意味づけが行われ、一体感が醸成されることが期待される。

次のステップとして、自らが発見、編集した地域資源、情報を外部に発信するという、「資源化のプロセス」が起こる機会をつくる。そのために、地域の人々の協働をもたらし、方向性を打ち立て、思いを広め、情報発信を推進していく人材が不可欠であり、人材の育成と、八女市の地域づくりに関心のある人々のコミュニティ形成の支援を行っていく。

本年度は、8月に合宿形式で、八女市の方々と飯盛研究室の学生が合同で、フィールドワーク、意見交換、提言発表会を実施した。2月には、旧市町村ごとにフィールドワークとワークショップを行い、地域資源の再認識と地域活性化に関心のある人々が集まるコミュニティ機能の構築に取り組んだ。また、実験的インターネットラジオサイトを制作することにより、今後、地域の人々の協働により、資源を発掘、編集していくプラットフォームを設計した。

次年度以降は、本年度、得られた資源(見いだした地域資源や人的ネットワーク)、実験的インターネットラジオサイトを活用し、地域の人々の協働をもたらし、住民自らが地域資源を発見、編集し、情報を外部に発信するという「資源化のプロセス」が起こる仕掛けをつくることを目指す。

1-2. プロジェクト推進イメージ



1-3. プロジェクトメンバー(慶應義塾大学側)

- 飯盛義徳:総責任者
慶應義塾大学総合政策学部准教授、
慶應義塾大学SFC研究所地域情報化研究コンソーシアム代表
- 西田みづ恵:総括プロジェクトリーダー
慶應義塾大学大学院政策・メディア研究科博士課程、
慶應義塾大学総合政策学部非常勤講師、佐賀大学理工学部非常勤講師
- 下川佳代:現地取りまとめ、その他
慶應義塾大学SFC研究所所員(訪問)
- 学生プロジェクトメンバー(2010年度)
杉智史(リーダー・総合政策学部3年)
仁田原由依(4年)、佐竹真悟(3年)、西中彰平(2年)、藤川徹也(2年)、
高野未久(2年)、深野真央(1年)
- 学生プロジェクトメンバー(2011年度以降)
※4月に選抜予定

2

2010年度プロジェクト内容

2-1. 合宿形式による地域資源再発見プログラム

- 本プロジェクト開始にあたり、八女市の方々、飯盛義徳研究室の学生たちと合宿形式で、コミュニティFMを活用した地域活性化策について検討する意見交換や提言発表を実施した。そして、地域資源を再認識した上で、地域再生に関心のある方々のコミュニティ形成の初期段階の基盤を構築した。
- 実施日
 - ・ 合宿前勉強会：2010年9月6日（月）
 - ・ 合宿：2010年9月9日（木）－11日（土）
- 参加学生
34名（男25名、女9名）
- 日程
 - 9月 9日：視察、表敬訪問
 - 9月10日：視察、意見交換会
 - 9月11日：提言発表会



<提言発表会後の写真>

2-1-1. 合宿前勉強会

- 合宿において、八女市の方々と、コミュニティFMを活用した地域活性化策について検討する意見交換や提言発表を実施するため、事前に学生たちで勉強会を実施した。まず、各旧市町村について情報収集し、8班に分かれ、キャッチフレーズを作成し、魅力や課題点を分析した。次に、全国各地のコミュニティFMの事例を調べ、運営や継続に必要な要素の抽出・議論を行った。

- 日時:2010年9月6日(月)9:45~12:30
- 場所:慶應義塾大学湘南藤沢キャンパス O12
- 内容:
 - ・ 八女市元気プロジェクトの説明
 - ・ キャッチフレーズの発表
 - ・ 全国各地のコミュニティFMの事例発表
 - ・ 木口恒氏によるFM講座
(※木口氏はFM番組出演経験を持つ)
 - ・ 次田尚弘氏によるコミュニティーFM実演講座
(※次田氏は、和歌山市のコミュニティFMで番組制作経験を持つ)

2-1-1-1. 各旧市町村のキャッチフレーズ作成

合宿勉強会において、各班から以下のキャッチフレーズが作成された。

	黒木	上陽	立花	星野	矢部	八女
1班	笑顔を照らすほたるの光	石橋が未来へつなげる架け橋に	勇ましく伝統おりなす男ノ子焼をアナタも	いつでもきんしゃい星ば見に	秘境(木山)に囲まれて～みんなが気になる愛樹の「むら」～	
2班	一味違う自然が体感できる街		竹の子の里	時の流れを感じさせない村	自然と触れ合える村	歴史残る街、八女
3班	森の力は、私の力。	石橋を超えるとそこには蛍がいた。	キウイ、タケノコ、温州ミカン。	あがらんの一、星ノ村ノ世界二	見よ！！ニワトリの走りを。	滋味の宝庫、八女市。
4班	お茶を飲んで藤見をしましょう 黒木町	深い味わい 上陽町	果実楽園 立花町	二人きりで流れ星を	矢部村で豊かな時間を	お茶と歴史のまち 八女
5班	ホテルバレー、黒木町	活気溢れるまち、上陽町	みずみずしいまち、立花町	星空に一番近いまち、星野村	歴史と自然が息づくパワースポット、矢部村	玉露と伝統の薫るまち、八女
6班	※新八女市のキャッチフレーズ 「2000年の歴史が眠るまち八女」、「緑と古の香り、八女」、「よーらあがらんの一八女」					
7班	寄ってこ、黒木。	ほたるの光、最近見たのはいつですか	あなたに、魅せたい。	毎日新鮮！毎日発見！	表情(かお)が変わる町。	伝統と、人と。
8班	黒木の大藤、600年の歴史		福岡のフランス、ワインの町	星の降るまち星野村	都会人のためのふるさと～秘境の宝物～	あがらんの一【この地の女神】とお茶会へ～あまおう、巨峰、幸水～

2-1-1-2. キャッチフレーズ作成から導出された地域の特徴

合宿勉強会のキャッチフレーズ作成において、以下の特徴が見えてきた。

黒木	強みは、八女茶発祥の地や紅葉が綺麗、そして蛍などが挙げられ、キャッチフレーズも蛍を使ったユニークなものが多かった。一方、弱点として、アクセスの悪さや冬の景観がわからないなどが挙げられた。
上陽	強みとして、蛍を見ることができるきれいな水や自然の豊かさ、また石橋という観光資源があることが注目され、キャッチフレーズもこの特徴を前面に出すものが多かった。弱点は特に挙げられなかった。
立花	強みとして、竹の子の生産、竹林面積(町村単位)が日本一であることが注目されていた。その他、男ノ子焼き、キウイフルーツ、ワインなど食材に関するものも多く、キャッチフレーズも上記の食材をイメージしたものとなっていた。弱点は特に挙げられなかった。
星野	強みとして星空や棚田が多く挙げられ、キャッチフレーズも星を使ったものが多かった。また、弱点としてはアクセスの悪さや高齢化などが挙げられた。
矢部	強みは、林業や農業が盛んであることや日向神ダムがあることなどが挙げられた。一方、山地が多く、人口が少ないということが弱点として認識されていた。キャッチフレーズは、木や山など自然をイメージしたものが多かった。
八女	強みは、伝統工芸品や歴史的文化財の多さが挙げられ、キャッチフレーズもそれをイメージしたものがほとんどであった。一方、弱点としてアクセスの悪さが挙げられた。

2-1-2. 合宿の内容

- 実施日：2010年9月9日（木）－11日（土）
- 参加学生：34名（男25名、女9名）
- 日程
 - ・ 1日目（9日）：視察、表敬訪問
 - ・ 八女の視察（福島伝建地区、伝統工芸館）
 - ・ 星野の視察（星の文化館及び周辺施設、池の山荘）
 - ・ 市民の方々と交流会（グリーンピア八女）
 - ・ 2日目（10日）：視察、意見交換会
 - ・ 街並み保存協議会メンバー案内による黒木視察（黒木伝建地区、藤の里、学びの館）
 - ・ 市民の方々と学生たちのグループワーク・意見交換（黒木総合支所大会議室）
 - ・ 黒木の視察（お茶の里記念館、霊巖寺）
 - ・ 提言作成（グリーンピア八女）
 - ・ 3日目（11日）：提言発表会

2-1-2-1. 1日目: 視察、表敬訪問

八女の視察（福島伝建地区、伝統工芸館）



<福島伝建地区1>



<福島伝建地区2>



<伝統工芸館>

星野の視察（星の文化館及び周辺施設、池の山荘）



<星のふるさと公園>



<星の文化館>



< 星野温泉「池の山荘」>

2-1-2-2. 2日目: 視察、意見交換会

街並み保存協議会メンバー案内による黒木視察 (黒木伝建地区、藤の里、学びの館)



<黒木伝建地区>



<旧松木家住宅>



<学びの館>

黒木の視察(お茶の里記念館、霊巖寺)



<霊巖寺>



<霊巖寺座禅岩からの眺め>



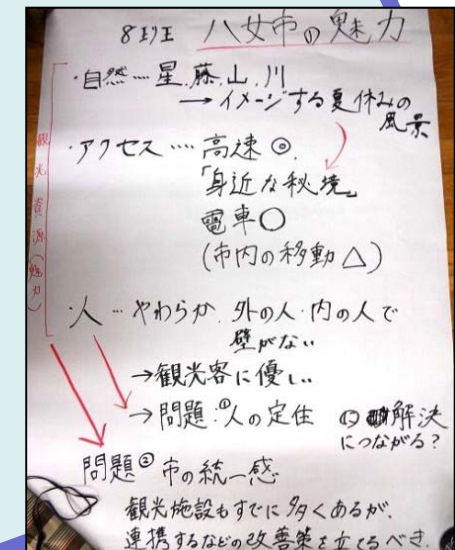
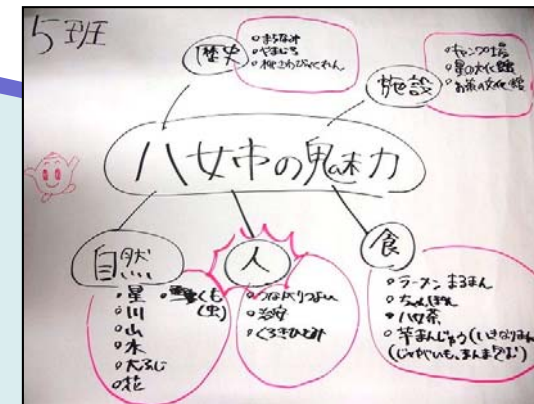
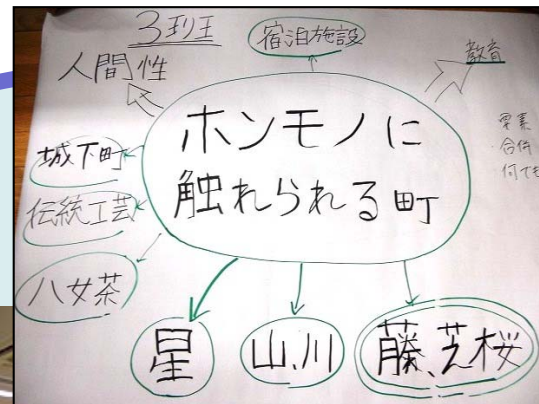
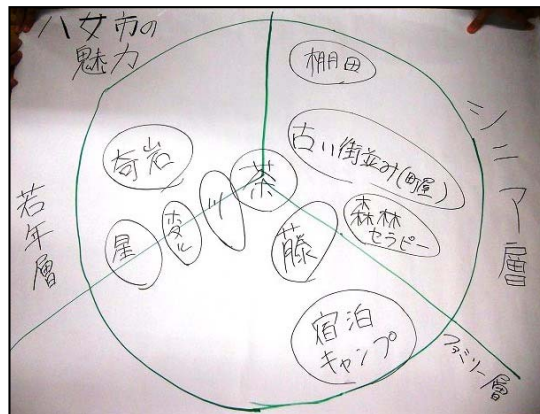
<座禅岩頂上目掛けて>

2010年度八女市元気プロジェクト

2-1-2-2.

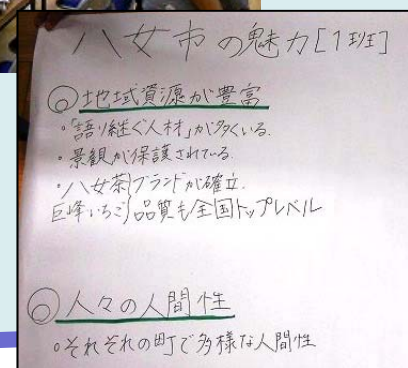
2日目:視察、意見交換会つづき

市民の方々と学生たちのグループワーク・意見交換（黒木総合支所大会議室）



少子化に伴って教育にも変化

- ・グリーンヒアが誇り(昭和61)
- ・お茶(品評会)→王露産
- ・JAハ女販売数日本一
- ・黒木大藤(ハニバナ)
- ・コミュニティセンター
- ・藤の里



2010年度ハ女市元気プロジェクト

2-1-2-3. 3日目: 提言発表会



< 提言発表会の様子 >



< 学生からの提言発表 >



< 住民の方からの意見1 >



< 住民の方からの意見2 >

2-1-3.提言発表内容（概要）

最終日の提言発表会では、学生たちが「コミュニティFMを活用した地域活性化」に向けた以下のような内容を提言した。

	タイトル	提言内容概要
1班	みんなの八女っ子学園	1班からは実際にコミュニティFMが開局された後に、どのような番組が望ましいかその具体的番組内容について提言された。具体的には、八女市を1つの学校と見立てた番組を放送することで、出身地という枠組みを外し、みんなが八女っ子学園の一員として、魅力を持ち寄って楽しく参加できる場を作るという内容である。期待される効果は、旧市町村間の壁を越えた新しいつながりの形成である。一方、課題は、パーソナリティ、スポンサー、リスナーの確保である。
2班	八女市の中心で愛を発信する	2班からは、旧市町村への郷土愛を活かして、新八女市への愛着を持つために、コミュニティFMの活用が効果があるのではないかと提言があった。さらに、そのための短・中・長期的な計画も発表された。具体的には、短期的に、認知度upのための交流イベント、中期的に、各地域の「情報」共有、長期的に、自主的な運動や組織の確立という計画である。
3班	双方向性コミュニティFMを利用した自発的な地域資源の再構築	3班からは、コミュニティFMをラジオ端末から一方的に発信するのではなく、インターネットラジオサイトも活用することで、携帯電話やパソコンから双方向にコミュニケーションがとれるようにするという提言がなされた。双方向にすることにより、一般の地域住民が番組の制作や出演に携わることができ、新しい人と人とのつながりが形成されるなどの効果がある。また地域外の方の参加も可能になり、地域づくりの活力になることが期待される。
4班	八女の地域密着型アイドルグループ	4班からは、コミュニティFMの開局に併せ、身近な地域密着型のアイドルを結成することが提言された。具体的には、6人のアイドルで、それぞれの苗字に地区の名前をつけることで、市民に愛着をもってもらう。また、イベントを行い、市民の方と交流する場を持つことで、番組に巻き込んでいく。さらに、外部にも発信することで、ファンを作り、実際に足を運んでもらえるような仕組みを作る。
5班	若者がつくるコミュニティFM	5班は、若者が外に出ていくことや地域の知を若者に伝承できていないという課題に着目し、若者が番組を作るという提言を行った。具体的には、教育機関との連携し、ラジオ制作のノウハウを育むワークショップなどを行い、八女市主催の学生ラジオコンテストを開催する。若者が番組を持つことで、親、親戚、教員、祖父母など幅広い年代の地域住民がリスナーになるという効果が期待される。
6班	「声」を伝えるメディア	6班は、八女市の強みと弱みを分析したうえで、望ましいコミュニティFMについて特徴を5つ（聴かれるラジオ・地域の人々が欲しい情報をリアルタイム提供・地域に縦のつながり形成・継続性・リスナーとのコミュニケーション）あげた。具体的には、例えば、聴かれるラジオにするためにオープニングイベントを開催すること、また、継続性のために、会員制特典をつくるなどが提言された。
7班	初めの一步・ラジオ局としての形	7班からは、望ましいラジオ局の形態として3点あげられた。1点目は、24時間放送し続けることで様々なリスナーを巻き込むこと。2点目にサテライトラジオをYouMeタウンにすることで市民の目に、耳につくようにすること。3点目は八女市で起きたことだけではなく、日本で起きたことも両方の情報を扱うことである。
8班	八女わーど	8班は、住民だけを対象にするのではなく、観光客も巻き込むという提言を行った。具体的には、サテライトオフィスに住民も観光客も立ち寄りやすい場所に置くことで、地域内と地域外の人が出会うコミュニティの場にするという案である。このような機能を作ること、観光客が八女市の日常に触れることができ、また、住民とのつながりも形成され、定住促進が期待できる。

2-1-4. アンケート調査

- 提言発表会后、参加された市民の方と合宿に参加した学生対象に、以下の設問を含むアンケート調査を行った。

＜学生向けアンケート項目＞

回答者34名（男25人・女9名）

- 1 育った地域はどこですか。
- 2 普段から地域へのフィールドワークに参加していますか。
- 3 今までに研究や活動で入った地域を教えてください。
- 4 あなたの八女に対する関心の度合いを表して下さい。（合宿前）
- 5 あなたの八女に対する関心の度合いを表して下さい。（合宿後）
- 6 合宿に入る前後で何が自分の中で一番変わりましたか。
- 7 事前学習をしてもらいましたが、フィールドワークに入ってからこそ、わかったことはどのようなことですか。
- 8 八女市の課題はどこにあると感じましたか。
- 9 今後、八女市のまちづくりはどのように進めていけば良いと思いますか。
- 10 あなたは、そのまちづくりに関わりたいですか。
- 11 具体的にどのように関わっていきたいですか。

＜市民の方向けアンケート項目＞

回答者23名（男19名・女2名、無記入2名）

- 1 あなたは八女市の出身ですか。
 - 1.1 外へ引っ越しをした経験はありますか。期間と場所を教えてください。
 - 1.2 いつ八女市へ来られましたか。差支えなければ転居理由を教えてください。
- 2 外での経験が役に立っていると感じるときはありますか。
 - 2.1 それはどのようなことですか。
- 3 八女市に住んでいて、あなたが課題だと思われることはどんなことですか。
- 4 今まで、大学生と交流する機会がありましたか。
- 5 今日の大学生との交流で、どのような気づきがありましたか。
- 6 今回のように、学生たちが、八女市の外から入ってくることに對して、どのように思われますか。
- 7 今日参加する前後で、八女市に対するイメージや思いは変わりましたか。
 - 7.1 どのように変化されましたか。
 - 7.2 どのようなイメージや思いを持たれていますか。
- 8 今後、八女市はどのようにまちづくりを進めていけばいいと思いますか。
- 9 あなたは、そのまちづくりに関わりたいですか。
- 10 具体的にどのように関わっていきたいですか。

2-1-4-1. アンケート結果(学生)

Q1. 育った地域はどこですか。

地域名	人数(人)
東北地方	0
関東地方	19
中部地方(甲信越)	1
中部地方(北陸)	3
中部地方(東海)	3
近畿地方	1
中国地方	1
四国地方	1
九州地方	4
沖縄地方	0
その他	1

Q2. 普段から地域へのフィールドワークに参加していますか。

参加経験レベル	人数(人)
何度もある	6
あまりない	13
全くない	15

Q3. 今までに研究や活動で入った地域を教えてください。

※都道府県名のみ、順不同

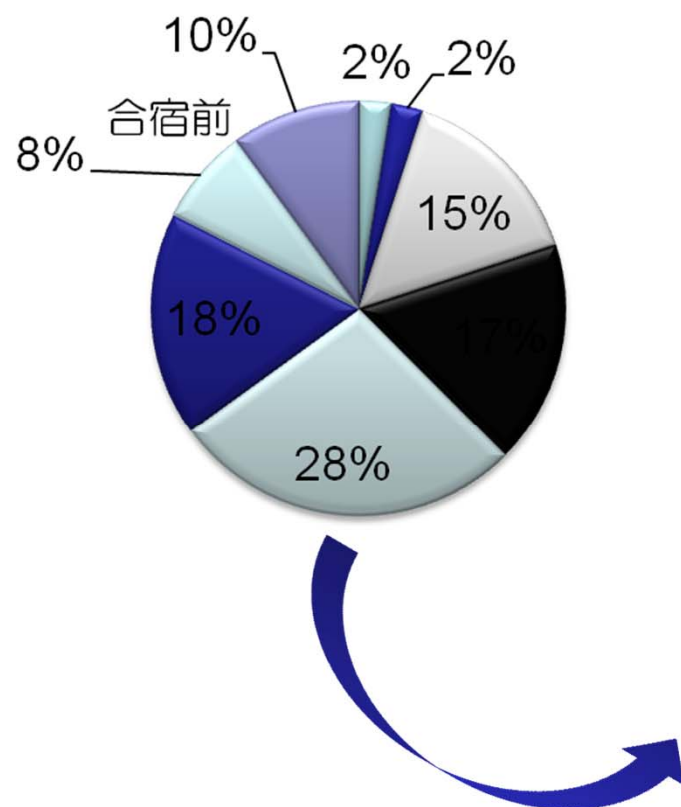
山形、高知、和歌山、佐賀、神奈川、東京、長崎、三重、石川、山口、岡山、岐阜、福井、北海道、茨城、香川、愛媛、広島、静岡、愛知

2-1-4-1. アンケート結果(学生)つづき

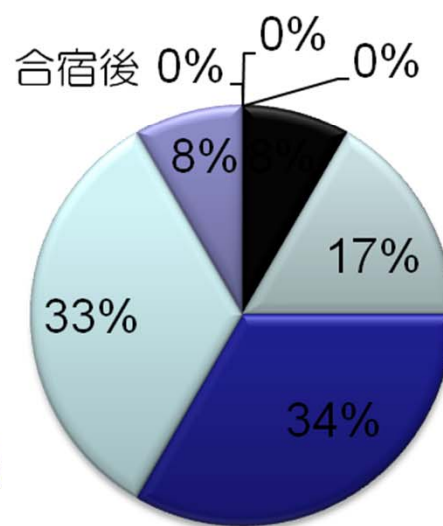
八女に対する関心の度合いの変化

Q4. あなたの八女に対する関心の度合いを表して下さい。(合宿前)

Q5. あなたの八女に対する関心の度合いを表して下さい。(合宿後)



	関心がある	関心がない
合宿前	64%	36%
合宿後	92%	8%



- 全く関心がない
 - ほとんど関心がない
 - あまり関心がない
 - どちらでもない
 - 少し関心がある
 - まあまあ関心がある
 - とても関心がある
 - 実際に八女市で何かしたい
- 関心がない
- 関心がある

2-1-4-1. アンケート結果(学生)つづき

Q6. 合宿に入る前後で何が自分の中で一番変わりましたか。

地域資源の再発見	・八女の印象。お茶だけでなく、あまおうや巨峰もある。/・ここまで観光資源の多い地域だとは思っていなかった。今まで様々な地域を訪れたことがあるけれど、どこも八女ほどではなかった。/・人の温かさ。地産資源への関心の薄さ。/・八女市の文化財の存在は知っていたけれど、それら一つひとつにストーリーがあることを改めて知った。/・「田舎」に対して良い印象を持つようになった。/・たくさんの地域資源がある豊かな地域という印象が変わった。
地域活動やプロジェクト参加意欲の向上(愛着・当事者意識の醸成)	・八女の人々の気概を感じ、今後ともプロジェクトを進めていきたいと思った。/・地域活性に深く関わりたいと思うようになった(八女以外の地域も含む)。/・星野村しか行けなかったけれど、星野村、そして八女市としての星野村について真剣に考えている地元の方々に出会い、自分も何か力になれたらと思った。/・自分達が八女市においてどれほど異質な存在なのかを自覚した。また、異質であるからこそ期待されていることも感じ、やる気の向上につながった。/・フィールドワークの経験がなく、何を行ったら良いのかわからない状態でしたが、今回の経験で0が1に変わった。次回からは、もっと観察力を高めたフィールドワークを行いたいと思った。/・地域ごとに隠れた資源があるものだということが実感でき、それらを知らない人に伝えたいという思いが生まれた。/・八女を身近に感じ、愛着が生まれた。/・何よりも、当事者意識を持つことができたのが大きいと思う。/・当事者意識。「まちを動かすかもしれない」という責任感。
地域に入り、地域の人と話す重要性の気づき	・広い視野で物語が理解することができた。また、自分の頭で考える以上に、案外、人と話をする中の方がアイデアは生まれやすかった。/・合宿に入る前は地域の観光資源のおおよそしかわかりませんでしたが、合宿で初めて八女市の方々の声を聞き、新しい問題点が見えてきました。/・現場での経験の量を増やす必要性。 ・フィールドワークとは、現地の方々と直接触れ合うことができる絶好の機会だと思った。/・ネット上での表層的な知識と実際に聞いた情報との差異が大きかった。より深く住民の方の考えを知りたいという意欲が湧いた。「意欲」と「対話」の重要性を感じた。/・八女市の方々の話を聞き、生の自然を感じたことで、九州で一番思い入れの深い場所になった。
地域づくりの重要性への気づき	・地域そのものに対する見方が変わった。国全体での地域改革の必要性を肌で感じた。/・今回学んだことを使って政策を考えることができ、興味が湧いた。/・まちづくりには多くの人に関わっていることを知り、大切さを改めて感じた。
地域の人々の気持ちに対する気づき	・合併した地域の人々の気持ちや想いを感じた。/・八女市への愛着。現場の方の優しさ、地域の方の想い、そして大自然や星など「ホンモノ」に実際に触れることができた。/・八女市民の地元を想う度合いと大きさを知った。/・多くの市職員の方々は、常に問題解決の為に行動しているけれど、時代の流れの中で困惑していると思った。
自分の成長	・八女市の厳しい現状の中で考察を重ね、独自の目線でその地域の良さというものを発掘できたことは、一つの自信を身につけることにつながったと思う。/・地域活性化における自分の力不足。他地域にアプローチしていこうとする姿勢。/・コミュニティFMに対する意識、知識。/・行政の方々と学生の目指す方向が一緒かどうか図ることは難しいと感じた。言いたいこと、伝えたいことを、より相手に伝わりやすくするにはどうすればよいのか、ある程度わかるようになってきた。/・問題意識の大切さ。事前学習がどれだけ大切かを知りました。/・グループで成果を残すことの大変さとやりがいを知った。協調性、連帯感の大切さ。/・リーダーシップに対する意識。

2-1-4-1. アンケート結果(学生)つづき

Q7. 事前学習をしてもらいましたが、フィールドワークに入ったからこそ、 わかったことはどのようなことですか。

地域の人の気持ち	・旧市町村の人がお互いのことをどう思っているのか。／・八女市の方々が私達にすごく期待してくれていたこと。／・「システム」と「システムを利用する市民」間の認識の差。まちの人々の人あたり。／・住民の意識。／・旧市町村それぞれが愛着を持っていて、八女市としての統一感があまりないという点。／・県、町、村民性。多様な考え。／・現地の人の地元に関する情報の深さ。／・人の温かさ。自然(星や森)。伝統工芸を作る職人さんや八女市を活性化させたいという熱意。／・方言を話す地元八女の方の温かさ。一人一人の方の考え方や想い。／・八女に対する情熱や誇りを持っている人が多くいること。／・地域住民の方の本音。／・現地の人は地元愛や危機感を常に抱いていると感じた。／・住民の地元紹介をする際の他にはない地元を想う心を感じた。／・実際の街並みや人柄、考え方を知ることができた。特に、今回でいえば街づくりに関わる方々の気持ちを知ることができたのが提言の参考として一番大きかった。
地域の現状	・施設の状況(写真で見ると限りきれいな場合が多かった)。／・八女市にはまだコンピュータがあまり普及していないこと。／・観光地といわれる場所の整備状況。／・市を支えている方々は高齢の方が多いこと。／・数字等ではわからない現状の本当の姿と問題点。／・場の雰囲気。空間的な広がり。距離(市街地から観光スポット)。／・グーグルマップでは簡単に歩けると思った場所がそうでもなかった。／・観光地として有名に成立させたいにも関わらず、ごみが多かったり、電線が見栄えを悪くしていたり、細部にはあまりこだわっていないのかなと感じた。細かいところを観ることが大切だと気付いた。
地域の資源	・歴史の重み、自然の景観、人々の温かさ。実際に「触れる」というのは現地でしかできないと思った。／・八女茶だけでなくずく茶などお茶の種類がたくさんあること。／・景観が予想以上に良かった。／・観光スポット。／・地元の自然環境や空気、建物や文化財の大きさ、質など自分の手で触れなければ実感できないこと。／・地元住民のぬくもり。写真では伝わらない景色。黒木瞳の実家。／・星野村には山しかないだろう、と考えていたが、実際には、資源をうまく使って上手に施設を作っていたことを始、現地に入らなければ状況はうまく把握できないことがよくわかった。／・「生で見た自然の美しさ」。歴史的建造物ももちろん素晴らしい資源だと思うが、「自然」という資源は他にない良さを持ち合わせているということ。／・現地の人の温かさ。ぬくもりを感じた。／・紙よりも口で継がれる歴史の価値の素晴らしさ。／・感性で感じるもの(私の中では特に星)は、フィールドに入って、真っ暗な中、満点の星空を見ると言葉で表すことのできない感動を覚えた。／・写真や動画、文章で伝えることのできない空気感を感じた。
対話の重要性	・「住民の方との対話」と「より実践に近づいたアイデア」が初期段階でのプロジェクトでは重要であると始めて認識できた。／・フェイストゥフェイスの対話により、新たな視点が生まれるということ。数値だけではわかりづらい部分も見えてきた。／・各地に住む人との対話の重要性。
地元の方と自分たちの考え方の違い	・現地の人の問題意識と我々が考えていたものが多少異なっていたとわかった。／・自分たちだけが一生懸命勉強しても、なかなか意思が通じないな、と思った。
地域活性化の難しさや課題	・合併した地域で活性化を考えることの難しさ。地域の方々が想像以上に旧市町村に対して愛着を持っていることが分かり、その気持ちを大切にしながら一つの地域として意識を統一していくことの難しさを感じた。／・「まちづくり」というものは、地域の方々の当事者意識が必要不可欠だと思った。／・実際に住民の方が考えていること、歴史や伝統、施設などが充実していたことが分かった。しかも、現場の方々は一生懸命頑張っているという実感を持っている。そこで何が足りないのか(CFMなどの改善をしていく意味で)。それは「生活とつなげる」何かしらの各人に利益(そのような言葉で片付けてはいけません)を生むことで強い問題意識を持ってもらう必要があることだとわかった。

2-1-4-1. アンケート結果(学生)つづき

Q8. 八女市の課題はどこにあると感じましたか。

旧市町村間の連携	・各市町村の統一、連携が不十分(統一する必要はないと思いますが、それぞれの良さを伸ばしつつ連携していくことは重要だと思いました)。/・地域間格差。一つになることへの認識。/・地元の方が合併というチャンスを掴みきれていない、何も変わろうとしていないところが課題であると思った。/・旧市町村の壁をとり、八女市としてまとめること。/・合併したばかりということもあり、一つの集合体になりきれていない。/・旧市町村の意識が強い。「八女市」としてのまとまりは必要だと思う。しかし、同時に各地域と比較できる目も必要。/・旧5カ町を1つの八女市としてみんなが見えるようになるか。/・旧5カ町村の一体化。/・八女市全体としての意識の統一をいかに図るか。/・ももとの自分の地元を優先して利益を考えているのではないかと感じられた。八女市全体という大きな視点で物事を考えられるようになることが必要だと思う。
若者の人材育成・活用	・世代交代(若者の人材)/・次世代の方の育成。/・40代ぐらいの方々がもっと積極的に地域活性化についてとり組めるようにすべきだと感じた。50～60代の意見を聞くことができなかった。/・若い力を巻き込もうとしていない。/・若者の巻き込み(IUJターン、雇用の創出)/・若者をどうまちづくりに巻き込んでいくか。/・若い力がないことだと感じました。市内を歩いていても若い人と会えることはなく、活気がない町に感じました。CFMを立ち上げる際にも若い力は必要不可欠だと思います。
地域の魅力発信	・自分が住む町、村の魅力を知らない。PRがうまくいかない。/・お茶などはもっと名前を統一化した方がブランドとしてアピールできると思いました。/・お茶などの農作物を始め、伝統工芸や自然が多種多様かつクオリティが高い状態であるにもかかわらず、その情報を上手く伝達、広告しきれていない。/・また、道で出会ったおじさんに「八女の魅力は何ですか?」と聞いたところ「俺にはわからん」と言われてしまいました。地元の方が八女を好きになることが最初の第一歩だと思いました。/・「なんでもある」のは分かるが何かに特化する(選択する)考えがあまりされていない。/・ブランディングと各地域の「八女市」としてのアイデンティティ確立。/・おもてなしの心を高める必要。どう口コミ、リピート観光客を増やすか。/・たくさんある資源をどう発信していくか。
課題の発見・可視化	・目的の明確化:何を、いつまでに、なぜ、が不明確。自立・分散・協調的なシステム作り:市主導では政策に限界を感じた(広い土地、元町、村民というフィルターがある為)。/・やはり合併市ということに関する問題点と地産地消の意識の低さ。高齢者の現代ニーズに合わせた知識の欠如。/・「どうにかしたい」という気持ちだけが前に出て、色々なことに目が行きすぎている。一つひとつ目の前にある問題を解決する必要があると思いました。/・そのままだでも豊かなので危機意識がない。なぜ新八女市で一体化するのか必要性がわかりにくい。/・旧黒木町の方がおっしゃっていたように「中途半端に便利」、変革を求める強い問題意識を持った方がいないところに課題を感じました。
市民の主体的参加	・保守的すぎる。個性は活かすべきだが、全体としての(旧市町村それぞれの)ビジョンがない。自分たちのわからない知識に対してぶつかったり、探究しようとしにくい。/・地域の方々が保守的である点が課題であると思った。/・住民の積極性。
人や資源のつながり	・地域資源や人が点在してしまっていることが問題だと思います。/・社会システムのデザイン、相互作用、関係性のデザイン。
少子高齢化・人口減少	・少子高齢化による産業の縮小。行政のサービスの限界と国からのサポートの限界。/・人口の減少と高齢化。
インフラや施設の整備	・僕はまず、インフラ設備が重要だと感じました。CFMにしても新八女市となり、住民同士の情報共有をうめる「起爆剤」となることは間違いない。しかし僕は、ADSLによるインフラ整備以上に道路や橋などの設備の方が先であると感じました。地元に入ってみると狭い道路も多く、施設の保全に少しお金を投資したほうが良いと感じた。狭い空間(八女市)をうまく、地元資源と化学反応を起こさせながら上手く住民と共有していくことが大切だと思いました。/・住民が外に出る施設が少ない。/・衣食住及びその他生活に関わる設備。
コミュニティFMに対する知識・考え方	・CFMの本質を誤ってしまっている点。CFMとネットを使ったまちづくり、またFMとCFMを同じものと考えている点。CFMを活用したいのに住民の方のアイデアには「それはCFMでは無理だ」と考えてしまうことがあった。/・あまりFMについて知らないところだと思いました。少し安易に考えすぎているのかな、と思いました。

2-1-4-1. アンケート結果(学生)つづき

Q9. 今後、八女市のまちづくりはどのように進めていけば良いと思いますか。

市民主体の地域づくり	・地元の方(中・高生、お店の方、農家の方含め)が中心となつて行えるまちづくりをする必要があると思います。/・地元の方の自発性を促すことが、最初のステップであると思う。/・よそ者ばかりに頼るのではなく地元から自発的に盛り上がる必要がある。/・市の方が「行政が今までの中心を担ってきたので一般の人、民間を置き去りにしてきた」と仰っていました。行政は仕組み作りを中心とし、市民全体が自発的に関わっていく流れを作る必要があると思います。/・住民全体にすばやく移行させていかないと厳しい。/・まちづくりに参画するメンバーには(精神面での)「統合」に向けた生産的な議論を行うべきであると思う。/・広範囲の住民を集めた集会を何度も開こう。/・みなさん危機感を持たれているので、最初から最後までやるよりもきっかけを作ったり、ときどきチェックしながら進み具合を確認していく。
地域資源の発掘・発信	・旧市町村を越えた交流機会の創出。統一した八女市に向けて観光資源の整理。/・根本的な意識改革をし、大自然を活かした観光地としての町の発展と現代のニーズにそつた意識変化をメインストリームにすえる。/・旧町村という型に縛られることなく、一つの八女市ということ意識しつつ、各町村で盛んだつた作物や祭りを残しのばしていくことが重要。/・特産物のPR。これはせっかく良いモノを持っているのにもったいないと思います。
つながりの再形成	・旧市町村がまとまりを作れるCFM。/・内⇄内、外⇄内のつながりを更新し続けること(田舎は特にマンネリ化しやすい)。/・帰属意識を取り除く。/・「今まで」の郷土愛+「新」八女愛。/・横のつながり。旧市町村同士のつながりと共に、縦のつながり。世代間のつながりが生まれるようなまちづくり。
外部との接点	・外部の風を取り入れるべき。慶應との連携だけでなく、住民自身が外に飛び出し、刺激を受ける。/・定期的に外部の視点を取り入れ、常に柔軟な考えを生み出す必要がある。/・コミュニティFMにとにかく力を入れて有名事例になれば、外から注目ができるのではないかな。/・慶應だけでなく、様々な団体とコラボし、多角的な視点からの現状分析と解決策を模索すると良いと思う。
様々な分野との連携	・コミュニティFMから離れた部分でも考えていく必要がある。「危機意識の醸成」はCFMでやるものではないと思うから。/・産業発展(歴史的な産業や伝統産業、農業も含む)。/・市町村の統一だけでなく、ここでは自然環境、観光施設、住居の融合がはかれると考える。
ビジョン形成	・目的の明確化。短・中・長期レベルでの社会システム作り。でも、なぜ地域活性化をするべきなのかは市民が考えるべき。自分が市民だったら、地域活性化を望んでいないと思うから。/・慎重なフレームワークの構築を心がけるべきだと思う。/・住民の多くは防災よりも観光の面で効果を発揮することを期待しているように感じられた。そもそもこちらが何を以てどのようなことを実現していけるのかについての認識を学生と住民との間で一つにしておくことが求められると思う。
若者の活用・主体性	・若者を巻き込んで、どう八女全世代に聞いてもらえるようなコンテンツ、CFMを醸成していけるか。/・若者を巻き込んだ八女市全体で行うコミュニティFMの形成。/・八女の市民が各旧市町村の魅力を感じて、若い力を取り入れていく。/・若年層からまちづくりを行い、高齢層に負けない地元愛を発揮してほしい。/・若い力を巻き込み、地盤を固める。
コミュニティFMに参加する・聴く仕組みづくり	・CFMに親近感をもてるようにすることがまずは大事であると考えます。その為、まずは目的ありきではなく、ラジオ(CFM)をよく聴く土壌づくりをすべきだと思います。/・コミュニティFMを行うのであれば、やはり段階を踏んだり、模擬ラジオを流したりしていく必要があるなと思いました。パーソナリティや参加者の方にも事前研修を通してノウハウを伝えていく必要があるなと思いました。

2-1-4-1. アンケート結果(学生)つづき

Q10. あなたは、その(Q9で書いた)まちづくりに関わりたいですか。

参加意欲	人数(人)
はい	18
いいえ	14
その他	4

Q11. 具体的にどのように関わっていきたいですか。

「八女市民の方と一緒に活動したい」

- ・慶應のメンバーを統括してチームと現地の方を絡んで一緒にプロジェクトを進めていきたいです。
- ・コミュニティFMのコンテンツと一緒に考えられたら良いと思います。
- ・八女市に住む若者とお話して、若者の視点からの八女のまちづくりについても考えて、世代の壁を乗り越えたまちづくりをするには、どうしたらいいのかを考えてみたいです。

「外部の意見や情報、自分のスキルを提供・活用したい」

- ・外部の人間としての提案。
- ・私は東京の出身なので、どこの地域に行ってもよそ者だと思う。外部の意見を地域の方に提供し、よりよいまちづくりをしていきたい。
- ・第三者的な目線での分析、政策立案。エンジニアとしてのソフトウェア開発。たまに八女に遊びに(癒されに)行く。
- ・私はアカペラサークルに所属しており、岩手県の陸前高田市にアカペラの歌を届ける活動をしております。10年前に岩手の方が娯楽の1つとしてアカペラを聞きたいと思ったことをきっかけに毎年アカペラを一週間程、地域の施設で歌っています。昨年から街並み保全に力を入れている盛岡の鉾屋町の活動も始まりました。若い大学生が一生懸命歌を歌う姿を目にして、中学生や高校生からお年寄りの方まで多くの方が刺激をもらったと言ってくれます。八女で何ができるかわかりませんが、若い人たちに頑張る姿を見せることができると思います。
- ・障害者支援コストの削減。
- ・私は「SFC市民塾」というプロジェクトに入っています。そこで八女市を特集した特別講座を設けることによって、より外部に情報を発信していきたいと思っています。

「外部に情報発信・外部とのかけはしをしたい」

- ・関東で八女の素晴らしさ、美味しさを伝える。2年後、コミュニティFMができた際には是非聞いてみたいと思う。
- ・似ている文化財等はあるから、それらをまとめて売り出しつつ差別化を図る。アイドル育成(笑)。CFMを作る上での地域の顔となるような人の存在は重要だと思う。八女外の情報を提供し、また外に八女内のものを出す橋渡し役に。

2-1-4-2. アンケート結果(市民)

Q1. あなたは八女市の出身ですか。

回答	人数(人)
はい	19
いいえ	4

Q1.1. 外へ引っ越しをした経験はありますか。期間と場所を教えてください。

回答	人数(人)
はい	6
いいえ	12
無回答	5

- ・1年、大阪府大阪市／4年、福岡県福岡市
- ・1年、福岡県福岡市
- ・7年、熊本市、福岡市
- ・4年、滋賀県彦根市／2年、長崎県佐世保市
- ・3年6カ月、福岡県筑後市
- ・1年、福岡市

Q1.2. いつ八女市へ来られましたか。 差支えなければ転居理由を教えてください。

- ・通勤している。
- ・1年前、会社の転勤から。
- ・平成22年2月の市町村合併から。
- ・25年前、結婚の為。

Q2. 外での経験が役に立っていると感じるときはありますか。

回答	人数(人)
はい	6
いいえ	2
無回答	15

- ・生まれは旧黒木町です。18～23歳まで町外へ出て、外から町を見ることができたことは良かったと思います。
- ・人間関係
- ・たくさんの情報に触れることができ、外から八女市を見ることができた。
- ・都会の利便性を知っている。八女を良くしていくことにもつながると思います。その反対もいえるでしょうね。
- ・他に出て初めて、地元の良さがわかった。
- ・かつて住んでいたところ(人)と八女のところ(人)との交流。

2-1-4-2. アンケート結果(市民)つづき

Q3. 八女市に住んでいて、あなたが課題だと思われることはどんなことですか。

地域間格差	・地域間の温度差。 ・旧八女市町村の一体。 ・エリアの特徴を活かした全市的バックアップの一体性。 ・広い地域のため、行政の目の行きとどきが心配。 ・八女市の住民意識までには時間がかかりそう。
少子高齢化・人口減少	・人口の流出と自然増加が少ない。 ・若者の流出。 ・少子高齢化。 ・雇用がない。若者の流出。
雇用・定住促進	・黒木町に住んでいるが外部から来た人はこんなところに住みたいと云われるが定住される方は男性で、女性が好まないの定住が進まない。インターネット販売(農作物)がしたいが、金の回収が問題である。 ・若年層の雇用の場をどのように確保していくか(定住促進)。それが課題。
市民の主体的参加	・ボランティアに参加する人が少ないのでは。 ・地域が活力、元気を生み出すには従前からの基幹産業育成に加え、地域産業と連携した新たな交流人口の増加に向けIT産業育成、情報発信の促進の視点に立った住民と協働による自発的、自立的な活動が必要。
インフラの整備	・収入源となる生活基盤の確保。 ・中山間地域に住む人にとっては不便な面が多い。病院、商店が遠い。また交通アクセスも悪い。そのような課題をどう解決してくか。 ・生活インフラの整備が遅れている。下水道が整備されていない。
人間関係の濃さ	・住む為にはとても良いところです。ずーっと住んでいると息が詰まる感じがあります。人間関係が濃いためでしょうか。これは良さであると認識しているので痛しかゆしのところです。
危機感の薄さ	・危機感がない。
人材育成	・少子高齢化が進行する中、せつかくの歴史、伝統、特産物、街並み(構造物等)それを生かしたまちづくりを行う人材が育っていない。
コミュニティ形成	・個人ごとの情報リテラシーの差はいまだに大きいですが。田舎のコミュニティも都会と同様に脆弱なものです。以前のようなコミュニケーションを取り戻せればと思います。

2-1-4-2. アンケート結果(市民)つづき

Q4. 4 今まで、大学生と交流する機会がありましたか。

回答	人数(人)
何度もある	8
あまりない	8
全くない	3
無回答	4

Q5. 今日の大学生との交流で、どのような気づきがありましたか。

新たな視点	・私達が普段気付かないこと等を学生さんたちの視点から指摘頂き、今後の町づくりに参考にしていきたい。 ・若い人たちの発想に触れることができた。 ・短い時間で、地域の課題等をよく捉えている。また、課題に対する方策等も良くまとめることができています。新鮮な感じがして、有意義であった。 ・積極的に色々な意見を出してくれました。 ・さすが若者。素晴らしい考え、アイデア。非常によかったです。 ・一時離れて生活し、戻ってきた際に地元に対し、思ったことを今一度思い出すことができた。 ・八女の外部の方＆若い学生の方々の意見を取り入れるのは有意義そう、と思いました。
情報技術やコミュニティFMの魅力	・CFMがはじめて訪れたときに比べて、驚くほど魅力的なメディアに見えてきました。 ・情報技術とコミュニケーション力による進展の可能性。
若者に対する期待	・最近のニュースの先入観からぬけられる気で、若者がいたことを安心しました。日本の国にもって。 ・皆さん、真面目に取り組んでいることを感じられた。
刺激	・軽いがその軽さが八女のおっちゃん、おばちゃんたちにはいい刺激になる。 ・活気をもらいました。
地域のことを考える機会	・地域コミュニティFMとして地域発信の必要性に向け、考える機会を作ってくれた。
学生へのご指摘	・交流に慣れていない。 ・今まで県内の大学生がほとんどで八女弁でも通じたが、今回は東京の学校、しかも全国から集まっていることで、八女弁が通じなかった。学生さんたちは大変苦労されてあった。 ・東京農業大学の学生を毎年10名近く2週間ホームステイさせ夏季の研修をさせています。家族のしきたりや礼など日本人特有のワビサビが少ない。

2-1-4-2. アンケート結果(市民)つづき

Q6. 今回のように、学生たちが、八女市の外から入ってくることに對して、どのように思われますか。

- ・新しい風をどしどし入れて、地域の活性化のモチベーションを高めてほしい。
- ・特に、中高校生との交流を望みます。
- ・大いにけっこうである。今の八女市には、外部からの意見、提言が必要。
- ・よいことだと思います。
- ・新しい風により意識がリフレッシュされた。
- ・いや、ガンガン来てほしいです。待っています。
- ・しぼりや因果関係が少ない自由意見を持つモノとして非常に重要と思う。
- ・若い方のトークが常に面白い。
- ・都市の消費者視点からダイレクトな声を聞くことができ貴重。継続的な事業が望まれる。
- ・その何人かでも八女のファンになってくれたらいいと思う。
- ・大変いいことだと思います。ありがとう。
- ・大いに歓迎。外部の声が地域を動かす。
- ・新しい意見を聞かれて楽しかった。
- ・期待を寄せております。
- ・とても良いと思います。SFCのやってらっしゃることは以前より興味があったので、いつか八女でフィールドワークして下さったらいいな、と思っていたところでした。きょうの朝刊でみて飛んできました。大歓迎です♪
- ・大変嬉しいことである。
- ・すごくいいことです。
- ・各町村、各集落での交流会を催す。



＜市民の方と学生との意見交換風景＞

Q7. 今日参加する前後で、八女市に対するイメージや思いは変わりましたか。

回答	人数(人)
変わった	7
変わらない	9
その他	1
無回答	6

Q7.1. どのように変化されましたか。

- ・若い人たちの考え方が参考になった。
- ・今まで考えていたことの整理ができた。
- ・八女のポイントの見方が地元の考え方と若者の視点が違うということ、新しい感覚。
- ・一歩前につながりを大切にと強く思いました。
- ・広域な八女(482平方km)で様々な地域での暮らしがあるが、住民も八女はひとつで住民が同じ目線で支え合うべきと考える。
- ・FMを使ったまちづくり…いいですね。私は主に住民側から自発的に行うまちづくりの在り方、住んでいる人が住みやすい町ということを考えました。メディアを生かすということがとてもプラスになりました。(ただノウハウ、進め方がうーんって感じです)あきらめない!!ですね。黒木はいいところです。ほんとは。しかし、黒木は!となってしまう。なかなか「八女は!」とは言えない住民意識。合併した時点で「終わった…」と思っていたことも事実。
- ・外部からの視点の内容を話されて、これからの考え方の参考にしていきたい。

Q7.2. どのようなイメージを持っていますか。

- ・いろんな面において良いところです。死ぬまで住みたい。
- ・一度のイベントでなく、継続的な取り組みが必要だと思います。
- ・良くも悪くも古い人間が多い。どこにでもある暮らしやすい町です。「いいところはいっぱいあって素晴らしいけど、わざわざ行くほどのところではない」という観光客視点はものすごく当たっていると思う。
- ・あくまで良い意味で変わらなかった。自分が持っていた打開策や方向性に頂いた提言内容との違いはそれほど感じなかった。実行する為にどうするのかのステージに移さないといけなかった。
- ・地域首長の強さ。
- ・農業、環境、自然の資源は豊か。「和の世界」が溢れている。
- ・やはり地元に住んでいる我々が変わらなければイメージは伝わらない。
- ・山などの緑色。しかし、現代的な、city的なエキスを取り込まれている感じです。
- ・従来から八女という言葉になれていた。八女郡が八女市に変わっただけ。旧町村との交流は従来とあまり変わらない。

2-1-4-2. アンケート結果(市民)つづき

Q8. 今後、八女市はどのようにまちづくりを進めていけばいいと思いますか。

- ・今ある自然も大切に、次世代へ行き継ぎたい。その為には、第一次産業をPRし、若い人たちにも興味を持つ施設が必要ではないかと思っている。
- ・市民の参加で財政不足を乗り越える。八女市の具体的な将来像をはっきりと打ち出す。
- ・地域の自治力の向上と行政との協働。例えば、住民が行政に補助を頼るのではなく、地域の中で検討し、地域住民が主体となって取り組み、行政は後押しする。または、地域住民ができること。行政がやらなければいけないことをみんなで認識し、協調性を持って取り組んでいく。ここの補助金を交付金化し、使途を地域の中で検討する。
- ・活性化する。という方向性は間違いではないと思います。
- ・「つながり」というキーワードが発表の中でも多く出てきました。CFMもちろんですが、人と人をつなげるメディアには恵まれた時代だと思います。旧来のコミュニケーションを補強していく力にして、つながりあるまちになりたいですね。
- ・どうしても後付けした人のみでまちづくりをしてしまいがち。一般住民の方々が真に参画できるシステム作りが不可欠と感じる。
- ・八女市のブランドの統一化、グループ化。
- ・他地区情報の共有と連携。
- ・市民自らが汗をかく。
- ・同じ考えの方々とグループで勉強していくなど。
- ・この八女に若者が定住し、若者の力で地域に発言を行い行動を起こし、若者の力で地域活力が生まれる地域でなければ高齢化率平均30%近くの中では地域力は失われていくのではないか。
- ・青少年育成事業に力を入れるべきと考えます。
- ・守るものを守りながら。大学の研究とからみながらやっていくのは良さそうだから。
- ・私は25年前に外部から入ってきて特に女の人の方の置かれている状況と厳しさに心を痛め、女の人が住みやすいまちという視点から人と人との関わり、つながりを進める松づくりに関わりたいと思ってやってきました。これからも、この思いは変わりませんので、行政のされるまちづくりにおいても、この視点を取り入れて進めてほしいと思います。
- ・観光と農村学を中心に「八女は一つ」という心で進める。
- ・住民が参加することを多く。
- ・自然とエコの先進地をPRしていくことかな。

2-1-4-2. アンケート結果(市民)つづき

Q9. あなたは、その(Q9で書いた)まちづくりに関わりたいですか。

参加意欲	人数(人)
はい	18
いいえ	0
無回答	5

Q10. 具体的にどのように関わっていききたいですか。

- ・八女地方は約7割を山林が占めている。再生可能な木材資源が大量に眠っている。CFM用の電力は、木材資源を利用したバイオマス発電により供給したい。この分野で協力してみたい(環境に負荷をかけない放送局づくりを目指したい)。
- ・情報収集や地域の課題解決の為の方策を検討するなどの事務局的なサポート。
- ・ボランティア的なことや情報発信の役割などを果たしていければと思います。
- ・CFM面白そうだなあ。3班が発表したような方向性の番組のシステムとか内容とかに関わったら楽しそうです。
- ・子どもたちや後輩、若年層で地域で生活する為に自らできることや、やらないといけないことまで伝えていきたい。
- ・地域づくり、人づくり、に今期あのCFMの活用をどうするのかという点で。
- ・業務の延長によるNPO活動により、成果の発展的実現。
- ・同世代(30代)との街づくり活動を続けていく。
- ・行政と住民が本当に協働の力を発揮できるよう様に今回の提言を生かしたい。コミュニティFMでそれを聞く人々の中に何が生まれそれがどの様に活力になるのかは実際に体験しないとわからない。
- ・地域間の温度差を取り除くには、今度10年、20年後に地元を背負って立つ若者を今から育てなければならない。今の人たちの意識を変えるのは難しく、今から八女市は一体何だという教育やイベントを開催していかなければならないと思います。内→内の交流、内→外への交流を積極的に行う意識をもたなければこの街は変わらない。これは我々住民の問題であります。この3日間、とても楽しく有意義な時間でした。ありがとうございました。
- ・傍らで関わりたい。この度はどうもありがとうございました。
- ・これまでもいろいろな形でまちづくりに関わってきた(関わりたい)と思ってきたのですが(黒木の場合のみに限ってといえば)、考え方がなかなか硬く、若者の意見をあげることは難しいと思うこともあり、息詰まることも多々ありました(気分としては今では諦めています)。このような形で慶應義塾大学というある意味‘ケンイ’のある方々が参加して下さることにより、硬い方々の頭がちょっと柔らかくなったり、権威主義的オジサマ方にも新しい何かを感じる力が育つのではないかと逆にありがたいです。私はこれから人と人とのつながりをつくることをすすめるというかたちで、できるところでまちづくりに関わっていきたいと思います。

2-1-4-3. アンケート結果の分析

● 合宿形式で大学生と市民の方が地域資源の再発見を行う意義

- 八女市に対して関心がある学生が、合宿を通して、64%から92%に増えた。具体的には、「地域資源の再発見」、「地域に入り、地域の人と話す重要性」、「地域づくりの重要性」「地域の人々の気持ち」という4点において気づきを得ていた。その他、自分自身が成長したという学生もいた。さらに、「地域活動やプロジェクト活動の参加意欲の向上」という変化があり、18名が今後も「まちづくりに関わりたい」と答えている。関わり方については、「八女市民の方と一緒に活動したい」、「外部の意見や情報、自分のスキルを提供・活用したい」、「外部との架け橋になりたい」という3タイプがあった。
- 学生たちは、合宿で八女市に訪れる前に、公開されている情報などを用いて事前学習を行っていた。しかし、フィールドワークに入らなければわからなかったこととして、地域の「人の気持ち」、「現状」、「資源」、「課題」をあげている。また、「地元の方と自分たちの考え方の違い」などから「対話」することの大切さや「地域活性化の難しさ」を実感している。
- 一方、市民の方は、大学生との交流で、「新たな視点」、「刺激」を得るとともに、「情報技術やコミュニティFMの魅力」に気づくというメリットがあった。また、この交流が「地域のことを考える機会」となっていた。その他、「若者に対する期待」と同時に、「学生への指摘」もいただいた。しかしながら、学生たちが入ってくることに限っては、ほとんどの方が意義を感じていることが結果から読み取れる。



- 上記の結果から、大学生が地域の姿を知る・感じるだけでなく、市民の方も新たな視点で地域を見ることが出来る。さらに、大学生の地域の活動やプロジェクトの参加意欲が上がり、市民の方が地域のことを考えるようになる。つまり、課題にもあがっていた「若者を巻きこむ」ための一つの方策になる可能性があることがわかった。また、それが学生たちにとっても自分を成長させる機会にもなり、地域大学連携における効果の一つである。

● 地域大学連携・協働のテーマなる課題や解決策

- 学生も市民の方も認識している課題が「旧市町村間の連携」、「人材育成」(特に若者)、「市民の主体的参加」、「少子高齢化・人口減少」、「インフラの設備」であった。一方、「地域の魅力発信」、「課題の発見・可視化」、「人や資源のつながり」「コミュニティFMに対する知識・考え方」は学生が気がついた課題であり、「雇用・定住促進」、「人間関係の濃さ」「危機感の薄さ」、「コミュニティ形成」は市民の方が感じている課題である。
- 解決策に関しては、学生と市民の方から「市民主体の地域づくり」、「地域資源の発掘・発信」「つながりの再形成」、「ビジョン形成」、「若者の活用・主体性」があがっていた。一方は、学生は「外部との接点」、「様々な分野との連携」、「コミュニティFMに参加する・聴く仕組みづくり」という方策もあげ、市民の方は「施設」「ブランドの統一化」「他地域との連携」「勉強会」という解決策も提示していた。



- 上記の結果から、両者同様に認識している課題や解決策は連携・協働がとりやすく、学生と市民の方で異なっていた課題と解決策については、両者が連携することで新たな可能性が生まれると同時に、意見交換をすることで共通の意識にしていく必要がある部分であると考えられる。

2-2. 学生プロジェクトチームの結成

- 今回の合宿により、18名の学生が今後も八女市のまちづくりに「関わりたい」と答えた。さらに、7名の学生が積極的に市民の方と一緒に活動したいと手を挙げ、合宿後に、学生プロジェクトチームが立ち上がった。

- メンバー

杉智史(リーダー・総合政策学部3年)

仁田原由依(総合政策4年)

佐竹真悟(総合政策3年)

西中彰平(総合政策2年)

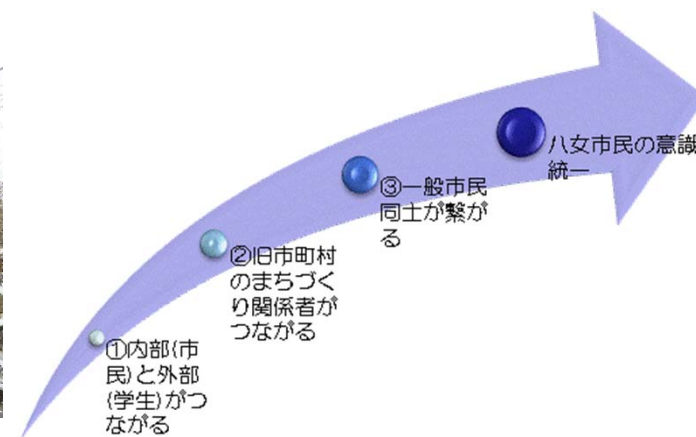
藤川徹也(総合政策2年)

高野未久(総合政策2年)

深野真央(総合政策1年)



＜メンバー(星野にて)＞



＜プロジェクトチームのビジョンイメージ＞

- 目標

CFMはFMよりも地域密着型の情報を発信し、親近感を重視している。また専門のパーソナリティでなくても「そこそこ出来る人なら誰でも」出演者になれるという利点がある。この特徴から、CFMを用いて市民の協働を促し地域活性の実現を目指すという目標を設定した。

そのためにはまずフィールドワーク・ワークショップを通して、住民と学生がつながりをもつことを目標とした。次の段階として各地域内の住民同士がワークショップを通してつながりを持つということを考えた。その後、各地域の枠を超えた形でワークショップを行い、その関わりの中で住民同士がつながることを目指している。最終的には旧市町村の枠を超えて住民が同じ問題意識を持つということをもって市民の協働と考えている。

- 2010年度のプロジェクトの計画

「八女について考える会(現楽生くらぶ)」を設立することで、学生と住民が未来の八女のビジョンを共有し、つながることができるという仮説をたてた。そしてまずは学生と住民が意見を共有することに重点を置きたいと考え、今年度のフィールドワークでは夏合宿で訪問することができなかった上陽、矢部、立花を含めた各地域の視察を行い、つながりを持つことを目的として住民との意見交換会を行うことになった。

2-2-1.

学生プロジェクトチームの活動1(研究計画発表)

● ORFでの研究計画発表

- ORFとは、Open Research Forumの略であり、「湘南藤沢キャンパス(SFC)で行われている産官学連携の推進を目的として慶應義塾大学SFC研究所が主催するイベント」のことである。1996年から毎年行われ、今年で15回目になる。ここでがSFCで研究を行っている各研究会がブースをもち、パネル発表や成果物の展示、デモンストレーションを行う。またブース説明のほかに専門家や教授のセッションやワークショップなども行われる。今年度のORFは「安住なき先駆Appreciating the Unclaimed」と銘打ち、2010年11月22日(月)・11月23日(火)の2日間にわたり、六本木アカデミーヒルズで行われた。
- 八女市元気プロジェクトチームも、「合併直後の市町村において市民の協働を促し、地域活性の実現を目指す」というタイトルで発表を行った。



<パネルを見に来た方への説明風景>

合併直後の市町村において市民の協働を促し、地域活性の実現を目指す
— 慶應義塾大学 飯盛研究室 八女元気プロジェクト —

杉 智史 (総合政策学部3年)・仁田 遼 (総合政策学部4年)・佐々 真樹 (総合政策学部3年)・西中 聡平 (総合政策学部2年)
藤川 雅也 (総合政策学部2年)・高野 実久 (総合政策学部2年)・深野 真実 (総合政策学部1年)

■ プロジェクトの経緯



福岡県八女市がICT(情報通信技術)による地域活性化に取り組むこととなり、現在その一環として、3年後コミュニティFM局開設を目指している。そこで「コミュニティFMを活用したまちづくりの具体的な方策と実践」を飯盛研究会が依頼された。平成22年9月9日～11日に八女市で研究会合宿を行い、その際八女市内の視察と意見交換会、及び八女市の政策を提言した。合宿後「八女元気プロジェクト」を立ち上げた。

■ 八女市の概要



八女市は福岡県西部、福岡市から約50kmに位置し、熊本県、大分県に隣接する。2006年10月1日に上尾町と、2010年2月1日に黒木町、立花町、星野村、矢部村と合併し面積が県内第2位の482.53km²となった。豊かな自然に囲まれ、矢部村、黒木町、星野村のお茶や立花町のたけのこの産産物、また旧八女市の仏壇、障子等の伝統工芸品の生産が盛んである。さらに、星野村の星の文化館や黒木町の大藤祭り等には、多くの人が市外から訪れている。

■ 今年度の目標

□ 地域と学生の協働
現場での活動をサポートしてもらい、また市民の意向をこまめに伝えてもらうことで、学生と市民が相互に意思疎通を図り、協働関係を築くことをめざす。

□ 仮説
上記の目標のため、八女について考える会(仮)を設立することで、学生と地域の人々が未来の八女のvisionを共有しつつなっていくことができるという仮説を立てた。現に合宿中に調査を行った八女市の問題点について、学生と八女市民の間で以下のような問題が生じている。このような問題をなくすことが学生と市民が協働関係を築く第一歩となるであろう。

	学生	地元の方
八女市の課題	地域の方々が保守的である点が課題であると懸念。それは逆に良い意味でつながりが強いということもあるが、(割合3年、男性)	生活インフラの整備が遅れている(下水道が整備されていないこと、ISO 代、男性)
	八女市全体としての意識の統一をいかに高めるか、若者をどうまわっていくか、たぶんある程度をどう確保していくか。(割合2年、女性)	人口の流出と自然増加が少なく、(割合2年、女性)

■ CFMの概要

	FM	CFM
放送区域	県単位	市町村
社員数	数十人	10人未満
売上高	8-10億	8-8千万
制作スタッフ	必要十分	少数
営業	専従・広告会社	自営・委託
対象	セグメントリスナー	地域住民全員
情報	全国・県	地域密着
情報収集	通信社・新聞社	自治体・地域機関
出演者	専門パーソナリティ	そこそこ出る人なりの誰でも
参加	メール・FAX・イベント	メール・ファクス・イベント・出演
目標	公共性重視	親近感重視
経営	主要企業・団体等が出資	第三セクター・NPO
局数	53 (2009年度)	243 (2009年度)

広域放送や県域放送よりも狭く、小規模のイベントや場内放送等で使われるミニFMより広い範囲で活用される「地域密着」・「移民参加」・「防災および災害時の放送」である。八女市内での役割は、市民が協働を進めていく中でのひとつのツールとして働くことが期待できる。

■ 3年後の目標

◎3年後—CFM放送局が開設するまで

□ 市民と市民がつながる
市民参加型組織の規模の拡大を図り、それに伴い市民が主体的に協働できる環境を作り出す。また市民の協働がイベント等を通じた形で実現され、八女市への帰属意識を高めることにつながっていく。そしてそれは最終目標であるCFMの効率的な活用、地域活性の土壌となる。現在は具体的な方策としては毎年4月下旬から5月上旬に旧黒木町で行われている大藤まつりを使った旧市町村間の交流を考えている。大藤まつりの期間中、「大藤まつり物産展」が行われているが現在の物産展は黒木町の名産品ののみを取り扱っている。これを各旧市町村ごとに出店してもらい、交流をはかろうというものである。

■ 今年度のフィールドワークの目標

夏のフィールドワークで学ぶことのできなかった上尾町、矢部村、立花町の視察を行う。同時に、協力関係を築くことを目的として地元の方と意見交換会を行う。

お問い合わせ先
杉 智史 (総合政策学部3年)
Mail: s08408ss@sfc.keio.ac.jp

<発表に用いたパネル>

2-2-2.学生プロジェクトの活動2(ClipCM講習会参加)

- コミュニティFMだけではなく、情報発信の方法を学ぶため、SFC研究所員の小原知子氏が率いる研究プロジェクトチームSISに、「ClipCM」の講習会を開催していただき、参加した。

●講習会の内容

- ・タイトル:「伝える」ワークショップ for八女市活性化PJ
- ・日時:2011年1月24日(月)18時~19時30分
- ・場所:慶應義塾大学湘南藤沢キャンパス K15
- ・講習の流れ
 - ①挨拶とClipCMに関する説明
 - ②アイスブレーキング
 - ③ワークシートに記入(SFCの良さを書く)
 - ④「大学受験生をSFCファンにする」というテーマを発表
 - ⑤一番知ってもらいたいこと・キーワードを一つ選ぶ
 - ⑥その魅力を具体的に書き出す
 - ⑦4コマ作品を描く
 - ⑧全員の作品を並べ、見て回る
 - ⑨投票 ⑩コメント ⑪1位受賞者のコメント
 - ⑫振り返り&フィードバック



ClipCMウェブサイト<http://clipcm.com/try_clipcm.php>。

●ClipCMとは

4枚の写真を使って作成する4コマCMのことであり、写真にモーションやテロップ、BGMをつけることで個性あるCMの作成が可能である。ClipCMの作成は、iPhone・iPod touchのアプリケーションで行われる。操作が簡単なことから誰でも簡単にCMづくりができることがClipCMの大きな特徴である。

ClipCMを作成する際には、ClipCMの概要や使い方を学ぶワークショップの機会が事前に設けられ、その中で受講者は「伝える」ものが「伝える」とはどういうことかという事も学ぶことになる。限られた情報量の中で本当に伝えたいものは何なのか、どうすれば相手に伝わるのかを考える作業は、伝えたいことの本質を見つめることができるという点において、情報発信に関する学びの機会ともいうことができる。

●八女市元氣プロジェクトにおける活用方法案

・ClipCMは誰でも簡単に自分が伝えたいものを発信することができる。4枚のみのスライドという特性から非常に個性が出やすく、住民が手軽に作品を投稿し他の人に見てもらふことによって、自分の地域の魅力等を発信したり、あるいは他地域の方の考えを知ったりできるということが期待できると考えている。また数多くの投稿をいただくことができれば、ClipCMのコンテストという形でイベントにも発展できるのではないかと期待もある。

・ClipCMワークショップでは参加者がワークシートに4枚の絵コンテを描いたのちに、互いの作品を評価しあう時間が設けられている。私たちがワークショップを受けた際に大変盛り上がったということから、楽生くらのワークショップにおいても他地域の住民同士がコミュニケーションをとるためのツールとしての役割が期待できるとも考えている。

・ClipCMでは自分が伝えたいことを単に「伝える」ということでなく、それが相手に「伝わる」ということを非常に大切にしている。そのため何をどのようにすればきちんと相手に伝わるのか等、ワークショップを通して学ぶ機会が必要である。あるいは住民が自分でCM制作をすることになれば機器・アプリケーションの使い方をきちんと学ぶ必要があり、また機器が手元にない方がCMを作成できるような仕組みづくりも必要となってくるだろう。

2-2-3. 各旧市町村視察

● 概要

1日1旧市町村を視察し、八女市全体の現状を把握し、住民の方とのつながりを作る。

● 日時

2011年1月31日(月)～2月5日(金)午前中～夕方

- ・ 1月31日: 星野(午後)
- ・ 2月 1日: 星野(午前)・立花(午後)
- ・ 2月 2日: 黒木
- ・ 2月 3日: 上陽
- ・ 2月 4日: 八女
- ・ 2月 5日: 矢部

● 目的

夏合宿でフィールドワークを行った八女・星野・黒木の住民とは、住民が学生との協働に意欲を示していることが分かり、また私たちの活動や目的を知っていただくことができた。しかし夏合宿では上陽・矢部・立花の住民と交流を持つ機会がなかったため、今回は八女市の全地域でフィールドワークを行い、各地域の視察と同時に私たちの活動を知ってもらうことで住民との関係づくりを行いたいと考えた。

● 成果(各地域の現状把握)

夏合宿では旧八女市、黒木町、星野村を訪問させていただいた。今回のフィールドワークではすべての旧市町村を訪問させていただいた。各地域を訪問させていただくことで、地域特有の魅力や課題を感じるとともに、八女市全体としての魅力や課題、また今後の活動の可能性や留意点を考えることにつながった。



2-2-3-1. 各旧市町村視察(星野)

星野製茶園	古陶星野焼展示館	星のふるさと公園
		
抹茶の製造工程を説明していただきました。また、自然仕立ての栽培方法の茶畑を見学したり、煎茶の淹れ方を教わり、実際に淹れてみました。	屋根中央に穴があり、雨や雪が降ると、館内中央の水面に落ちるよう外部の方が設計し、村内の大工が建築。地域内外の協働の力を感じました。	コテージの中や池を見せていただきました。学生のサークルや企業研修、また結婚式など様々な用途を提案されているのが印象的でした。
山本源太窯	星野まちの駅 鄙の厨房ひまわり	星野民藝
		
80年前に途絶えた夕日焼を復活させた山本源太氏のお話を伺いました。大変なことでも楽しむこと、継続することの大切を実感しました。	2日目、昼食をいただきました。お惣菜を3品を自由に選ぶことができ、ご飯とみそ汁がついています。地元の方もいらしていました。	機能性・デザインに優れた家具を見せていただきました。学生の僕たちにとってはびっくりする値段ですが、日本全国から注文があるそうです。

※山村留学センター、上郷地域交流センターは、車中からの見学。また、池の山荘にて宿泊。

2010年度八女市元気プロジェクト

2-2-3-2. 各旧市町村視察(立花)

ブルーベリーハウス	旧大内邸	大道谷の里
		
		
ブルーベリー栽培を始めたきっかけ、加工品販売の経緯などを伺いました。農家として続けていく難しさとともに、続けるために新しいことに挑戦していく気概を感じました。	明治・大正・昭和の建築方法が、一軒の中に全て残されていて、時代の流れを感じました。また、「自然と一体の暮らしを続けていたら、時代の方が戻ってきた」という言葉が胸に響きました。	県内で唯一登録された農家民泊を営む中島ご夫妻のお話を伺いました。農家と宿泊施設を両立する難しさを、様々な工夫で実現されていました。人の魅力のパワーを感じました。

※男ノ焼の里、飛形山、ミカン・キウイ果樹園、梅園、トンネルは、車中から見学した。また、道の駅たちばなでは、森久栄氏から農産物直売所としての工夫などの話を伺った。また、実際に買い物をして、立花の食の魅力や商品化する方、販売する女性の方の活発な姿が印象に残りました。

2-2-3-3. 各旧市町村視察(黒木)

関屋橋	旭座人形芝居	南笠原製茶工場
		
日本で一番小さい石橋と言われている関屋橋を実際に渡ってきました。	県指定無形民俗文化財である旭座人形芝居館内を見学。地元小学校で人形芝居を体験する授業を設け、継承する仕組みが作られていました。	異なる農家から茶葉を買い取り、同じ八女茶として生産。農薬の量や栽培方法に規定を設け、偏りが出ないように工夫されているそうです。
まちなみ交流館(旧松木屋)	五条家	田代農村活性化センター
		
今回は一部工事中のためお話を聞くことはできませんでしたが、このように手入れすることで状態を維持していることに気がつきました。	五条家は公家として活躍し、五醍醐天皇に関する資料などがあり、重要文化財に指定されているが、金銭面や後継者の課題があると感じます。	田代の風流は黒木町に続く太鼓踊りで、ここは地域住民が踊りの練習場になっている。新しい施設のため、今後は普段の活用もできそうです。

※黒木廻水路・黒木堰も見学しました。ここは水取り合戦が行われていた場所であり、その跡を見ることができました。

2-2-3-4. 各旧市町村視察(上陽)

線香水車	滝の宮	こぐま福祉社会尾久保研修所
		
水車で乾燥させた杉の葉を細かく砕く作業を見せていただいた。持ち主の馬場氏はとても魅力的な方だが、後継者がいないそうです。	縁結びの神社があり、観光地として発信していこうと施設が建設されたが、うまく活用されておらず、今後活用の提案をしていきたいです。	小学校廃校であるが、新しい施設であり、宿泊やカラオケ大会などで使われている。地域内外の人が交流できる可能性のある場だと感じました。
ふるさとわらべ館	旧川口邸	ホテルと石橋の里公園
		
子どもたちが遊べる遊具がありました。蕎麦屋では、農家の方に蕎麦の打ち方を教えたり、農家の食材を使ったり、地産地消が行われていました。	古い民家の新しい使い方を学びました。低価格で古民家に宿泊できそうで、次回はここを利用したいと思いました。	ホテルの育ち方と祭りの時の問題点などを伺いました。川近くまで車の規制をかけたり、山の奥まで人が入らないように工夫しているそうです。

※中川家、申上大茶園、わらべの里研修センター、サイーヒル打越団地、トンネル酒、打越ホテル池、宮ヶ原、大瀬橋、寄口橋は車中から見学した。

2-2-3-5. 各旧市町村視察(八女)

岩戸山歴史資料館	岩戸山古墳	丸森製菓
		
散歩に使われたり、イベントが行われる解放感のある古墳でした。歴史に触れることによる社会教育の場として、次世代へと継承していく必要性を感じました。		飴の製造を見学させていただきました。町工場が2軒のみで、後継者も不在ということでした。
土橋商店街	高橋家	八女市中央大茶園
		
商店街の歴史と現状について説明していただき、昔の組織やルールなどの運営体制は現代でも学ぶことがあるように思えました。	高橋家では家の造りについて、このみ園では茶にまつわる資料について説明していただきました。ストーリーがあり興味深いものでした。	広大なお茶畑で、景色がきれいでした。八女市のデートスポットになっているそうです。

※仏壇の近松辰雄商店では、職人の手作業でしか生み出せない質感の違いを肌で感じました。また、八女人形会館では、様々な時代・種類の人形、現代風にアレンジされた人形を見て、伝統文化の奥深さ、難しさ、そして面白さを感じました。

2-2-3-6. 各旧市町村視察(矢部)

日向神ダム	特産物販売所「出逢」	杉のふるさと文化館
		
七福神岩の中の蹴洞岩(けほぎいわ)は印象に残りました。また、ダム周辺の千本桜が咲く景色を見たいと思いました。	よもぎまんじゅうをいただきました。とても美味しかったのですが、観光客がお店の存在に気づきやすい工夫が必要だと感じました。	矢部中学校旧校舎を活用し、矢部川源流域の文化を紹介する施設。椎窓猛先生の地域や自然を想う気持ちが私たちにも伝わってきました。
杉の里溪流公園	旬の厨ソマリアン	杉の木工房
		
冬季は休業しているそうだが、吊り橋を渡り、染物間や陶芸館を視察しました。吊り橋はしたがガラスでできており、自然の雄大さを感じました。	夕食にカレーをいただきました。八女のような地域でカレーを食べる機会がありましたが、ここのカレーが一番美味しかったです。	「趣味としては面白いですが、私は仕事でやっているの辞めたいです」という職人の方の言葉の裏に仕事に対する熱意を感じました。

※八女津媛神社、大杉公園も見学しました。

2-3. 八女市元気ワークショップ

● 概要

- ・ 八女市元気ワークショップは、コミュニティFM(2012年開局予定)に向け、八女市における人と人とのつながりを形成し、新しい活動などが芽生えるようなプラットフォームを設計するためのワークショップである。まず、資源を発掘、編集していくプロセスの中で、新しいつながりを形成し、地域をどのように元気にしていくのかの意味づけが行い、一体感を醸成してゆく。次のステップとして、自らが発見、編集した地域資源、情報を外部に発信するという、「資源化のプロセス」が起こる機会をつくる。さらに、地域の人々の協働をもたらし、方向性を打ち立て、思いを広め、情報発信を推進していく人材の育成と地域づくりに関心のある人々のコミュニティ形成も目指す。
- ・ このワークショップは、2011年度以降、本格的に、継続的に取り組むものであり、今回はその第1回にあたる。そのため、地域資源の再認識と地域活性化に関心のある人々が集まるコミュニティ機能の構築に取り組んだ。

● 日時

2011年2月1日(火)～2月5日(金)18時半開場、19時～21時
※1月31日実施予定の星野は大雪のため延期。

- ・ 2月 1日:立花(立花市民センター:イベントホール)
- ・ 2月 2日:黒木(黒木総合支所:大会議室)
- ・ 2月 3日:上陽(上陽公民館:集会室)
- ・ 2月 4日:八女(八女文化会館:ホール)
- ・ 2月 5日:矢部(矢部基幹集落センター:2F農林研修室)

● ワークショップ内容

- ・ 「疑似体験まちづくりディスカッション」(前半)
 - ・ 「楽生クラブ:魅力発見グループワーク」(後半)
- 上記2つの同じプログラムを、各地域で実践した。



2-3-1. 疑似体験まちづくりディスカッション

- 「疑似体験まちづくりディスカッション」とは、日本の各地域のまちづくり活動の事例教材を用いて、その当事者の立場になりきって、今後のまちづくりのあり方について、参加者全員で考え、話し合うワークショップである。これは、ケースメソッドと呼ばれる教育手法を用いたものであり、繰り返し行うことで、戦略的意志決定能力、積極的行動力、問題発見・解決能力などを体得されるといわれている。また、NPO法人鳳雛塾で社会人向けに、慶應義塾大学SFCの飯盛義徳准教授の授業で大学生に、飯盛研究室VITA+プロジェクトでは高校生を対象に実施され、参加者同士の新しいつながりや主体的行動などの効果をもたらしている。

- 一般的な進め方

1. ケース教材の予習

ケース教材の課題を自ら検討

2. ケース教材のおさらい

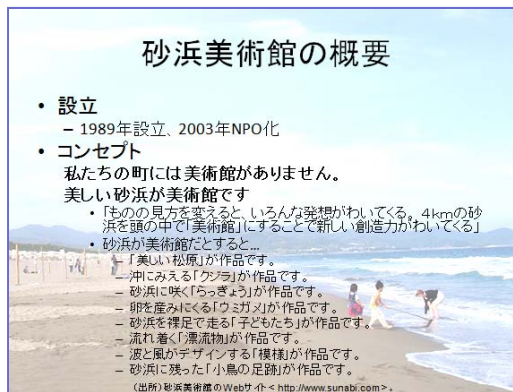
ケース教材の内容を整理し、論点を提示

3. 参加者同士でディスカッション

参加者全員で、主人公の立場に立って議論

4. まとめ

講師による若干のまとめ(視点の整理)



砂浜美術館の概要

- ・ 設立
 - 1989年設立、2003年NPO化
- ・ コンセプト
 - 私たちの町には美術館がありません。
 - 美しい砂浜が美術館です
 - 「ものの見方を変えると、いろんな発想がわいてくる。4kmの砂浜を頭の中で「美術館」にすることで新しい創造力がわいてくる」
 - ・ 砂浜が美術館だとすると...
 - 「美しい松原」が作品です。
 - 沖にみえる「クジラ」が作品です。
 - 砂浜に咲く「ちぎょう」が作品です。
 - 卵を産みこく「ウミガメ」が作品です。
 - 砂浜を裸足で走る「子どもたち」が作品です。
 - 流れ着く「漂流物」が作品です。
 - 波と風がデザインする「模様」が作品です。
 - 砂浜に残った「小鳥の足跡」が作品です。

(出所) 砂浜美術館のWebサイト < <http://www.sunabi.com> >

<事例の説明スライド一部>



<上: 講師の
ディスカッション
リード>

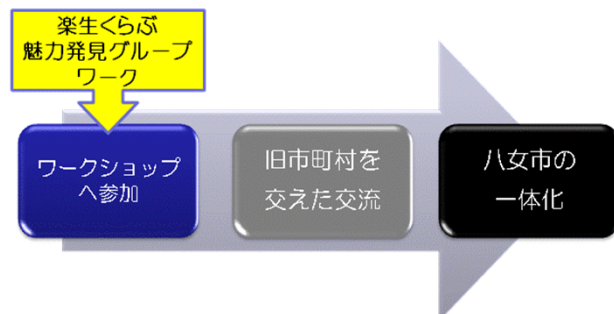
<下: 参加者の
意見交換>

- 今回の進め方

- ・ 今回は、来年度以降、本格的に進めていくため、体験をしていただくという位置付けのもと、ケース教材の予習は、PPTを用いて、講師が説明をした。その後、20分くらいで、参加者全員で意見交換を行った。
- ・ ケース教材は、「NPO法人砂浜美術館」という高知県黒潮町の地域づくりの事例を用いた。NPO法人砂浜美術館は、1989年に畦地和也氏が仲間とともに設立したものであり、「私たちの町には美術館がありません。美しい砂浜が美術館です。」というコンセプトの元、Tシャツアート展をはじめとしたイベントを企画・運営している。しかしながら、外の地域からはボランティアの応募やTシャツの応募などの参加があるものの、地元の人に魅力が伝わっていない、主体的に参加しないという課題がある。ディスカッションでは、この課題を、自分が畦地さんの立場ならどうしていくかを参加者全員で考えた。

2-3-2. 魅力発見グループワーク(楽生くらぶ)

- 楽生くらぶによるとは、学生と市民の方がグループを組み、堅苦しい雰囲気ではなく、楽しく、地域の資源を発掘、編集していくワークショップである。今回の「魅力発見グループワーク」では、8グループを作り、各グループに1人学生がつき、市民の方と各旧市町村の魅力を模造紙に書き出し、可視化する作業を行った。最後に、各グループで出た意見を発表した。



＜一番多くの参加者が
集まりました(八女)＞



＜模造紙に書かれた各旧市町村の魅力(黒木の3班)＞

※模造紙を6つに区切り、それぞれの枠に各旧市町村の魅力を書きだした。



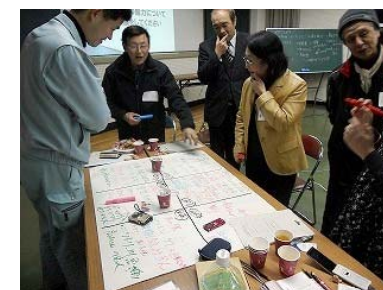
＜世代間で魅力が
共有されていました(立花)＞



＜主体的にペンを持って
書かれていました(黒木)＞



＜発表内容を写真に撮影する方も
おられました(上陽)＞

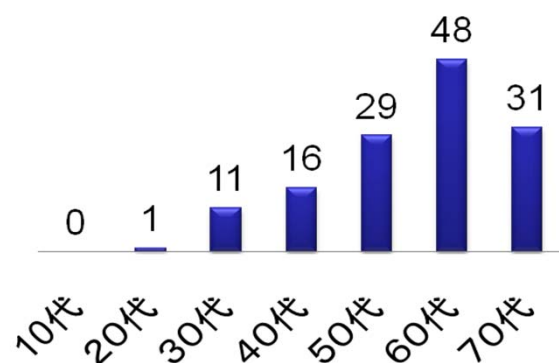


＜書きながら様々な会話が
なされていました(矢部)＞

2-3-2-1. 楽生くらぶアンケート調査

- 八女市元気ワークショップ後半の魅力発見グループワークを行った「楽生くらぶ」について、参加者にアンケート調査を行った(回答者138人:うち男性106人、女性24人)。

参加者の年代(単位:人)



Q1. ワークショップの長さはいかがでしたか。

長さ	人数(人)
長い	0
やや長い	8
ちょうど良い	103
やや短い	14
短い	5

Q2. ワークショップの満足度を教えてください。

満足度	人数(人)
満足	32
やや満足	60
普通	40
やや不満	3
不満	0

Q3. 学生くらぶの催しに今後参加したいと思いますか。

参加意欲	人数(人)
とても思う	15
思う	82
あまり思わない	7
思わない	2

2-3-2-1. 楽生くらぶアンケート調査つづき

Q4. まちづくりに関心がありますか。

関心度合	人数(人)
ある	85
少しある	29
あまりない	0
ない	0

Q5. まちづくりに自分も参加してみたいと思いますか。

参加意欲	人数(人)
とても思う	24
思う	73
あまり思わない	8
思わない	1

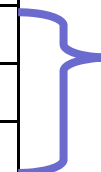
Q6. 普段よく利用するメディアは何ですか(複数回答)。

メディアの種類	人数(人)
テレビ	91
新聞	79
インターネット	53
ラジオ	21
雑誌	19



Q7. ラジオは週にどのくらい聴きますか。
また、いつラジオを聴きますか。

頻度	人数(人)
聴かない	33
1～2日	28
3～5日	24
ほぼ毎日	21



時間帯	人数(人)
朝	28
昼	32
夜	16
深夜	5

2-3-2-2. 楽生くらぶを通じた成果と課題の抽出

● 楽生くらぶの継続的な参加者の獲得

- ワークショップを通じて、八女市元気プロジェクトの存在を市民の方に知ってもらうことができ、今後の活動の基盤を作ることができた。また楽生くらぶについては、今後の催しに参加協力していただける多くの方がいらっしゃることを確認することができ、ワークショップについては次回86名の方から参加の表明をいただいた。

地域	全体	黒木	上陽	立花	星野	矢部	八女	その他
次回からの参加表明者(人)	86	24	19	8	1	15	18	1

● ワークショップの開催時期・場所

- 今回は初日に行われる予定であった星野村でのワークショップが中止となったことから分かるように、八女市内の多くの地域が中山間地に位置しているということで、雪や路面の凍結が予想される冬季期間はワークショップの開催を控える方がよいのではないかと結論にいたった。
- 楽生くらぶは今後、地域の枠を超えて活動を展開しようと考えている。私たちが実際に各地域を訪問した際に地理的な問題を感じ、参加者から他地域での開催であれば参加が難しいという声が上がっていたため、今後のワークショップの開催をどのような場所にするかということについて検討の余地がある。

● 参加者の構成

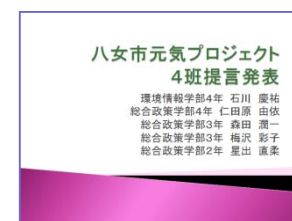
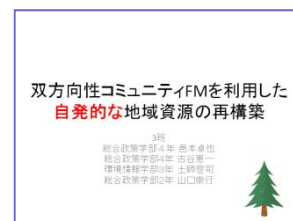
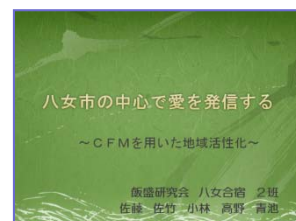
- 当初私たちは行政の関係者ではなく一般の住民で、また各年代層・男女関係なく参加者を募ろうと考えていた。しかしながら参加者の多くが行政関連の住民であり、参加者の大半が男性ということであった。地域の枠を超えて多様な住民が協働を実践していくことを目指す私たちとしては、今後の楽生くらぶでさまざまな住民が参加できるような方策を考えていく必要があると考えている。
- そのために今回とは異なる宣伝方法を考える必要がある。今回は行政に委託して回覧板での宣伝や行政区長への宣伝を行ったが、次回以降は今回つながりを持つことができた住民への直接の連絡や、twitterやブログ等を活用して宣伝を行っていかねばならないと考えている。

3

2010年度プロジェクト成果

3-1. 2010年度プロジェクトの成果1

- 合宿時の提言資料
 - ・ パワーポイントデータ8班分(KIAIさまに提出済)
 - ・ 提言の概要は、本報告書のp18参照。



2-1-3. 提言発表内容

最終日の提言発表では、学生たちが「コミュニティFMを活用した地域活性化」に向けて以下のような内容を提言した。

タイトル	提言内容概要
1. みんなの八女っ子宣言	85年からは実際にコミュニティFMが開始される。このような機運が生まれるのは、八女市が抱えている課題を解決するきっかけとなる。八女市を一つの単位として、市民が主体的に関与し、八女市をより良くするための活動を行う。八女市を一つの単位として、市民が主体的に関与し、八女市をより良くするための活動を行う。
2. 八女市の中心で愛を発信する	25年からは、八女市を一つの単位として、市民が主体的に関与し、八女市をより良くするための活動を行う。八女市を一つの単位として、市民が主体的に関与し、八女市をより良くするための活動を行う。
3. 双方向性コミュニティFMを利用した自発的な地域資源の再構築	35年からは、コミュニティFMを活用して、八女市を一つの単位として、市民が主体的に関与し、八女市をより良くするための活動を行う。八女市を一つの単位として、市民が主体的に関与し、八女市をより良くするための活動を行う。
4. 八女市の中心で愛を発信する	45年からは、八女市を一つの単位として、市民が主体的に関与し、八女市をより良くするための活動を行う。八女市を一つの単位として、市民が主体的に関与し、八女市をより良くするための活動を行う。
5. 若者がつくるコミュニティFM	55年からは、八女市を一つの単位として、市民が主体的に関与し、八女市をより良くするための活動を行う。八女市を一つの単位として、市民が主体的に関与し、八女市をより良くするための活動を行う。
6. 「声」を伝えるメディア	65年からは、八女市を一つの単位として、市民が主体的に関与し、八女市をより良くするための活動を行う。八女市を一つの単位として、市民が主体的に関与し、八女市をより良くするための活動を行う。
7. 八女わーるど	75年からは、八女市を一つの単位として、市民が主体的に関与し、八女市をより良くするための活動を行う。八女市を一つの単位として、市民が主体的に関与し、八女市をより良くするための活動を行う。
8. 八女わーるど	85年からは、八女市を一つの単位として、市民が主体的に関与し、八女市をより良くするための活動を行う。八女市を一つの単位として、市民が主体的に関与し、八女市をより良くするための活動を行う。

2010年度八女市元氣プロジェクト 18

<本報告書p18「提言発表内容(概要)>

- 八女市元氣ワークショップ開催を通じた提言資料
 - ・ 本報告書「八女市元氣プロジェクトーコミュニティFMを活用した地域活性化ー2010年度提言報告書」



2010年度八女市元氣プロジェクト

3-2. 2010年度プロジェクトの成果2

- 実験的ラジオサイトコンテンツ(学生版)
 - アマチュア(学生・住民)でもラジオ番組が作れることの提示
 - ＜http://blog.livedoor.jp/yame_pj/＞
- 実験的ラジオサイト「八女の話音」
 - 2011年度の活動の成果である番組を載せていくサイト
 - 将来、ここから八女市のコミュニティFMのラジオ番組デビュー
 - ※こちらをKIAI様のサーバーに搭載予定。
 - 現在は、<http://isagai.sfc.keio.ac.jp/yame/yamenowaon/>に仮開設。



＜「八女の話音」トップページ＞



＜「八女の話音」番組ページ＞

＜西日本新聞 2010年9月11日付＞

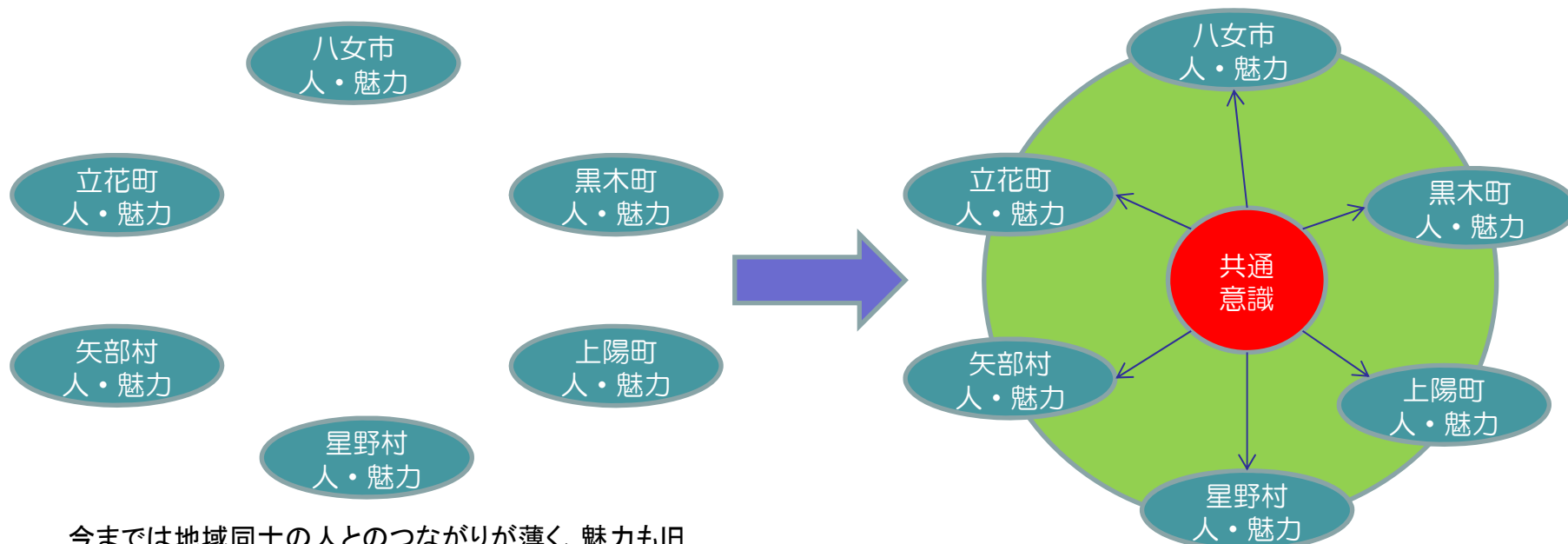
＜読売新聞 2011年2月3日付＞

4

2011年度以降のプロジェクト提案

4-1. 2011年度の方向性

- 来年度は「情報技術を使って八女市の住民同士が共通意識を持つ」ことを目標として活動する。2011年1月31日～同年2月5日までの八女市でのフィールドワークで、各地域の伝統文化・自然・食などの魅力と住民の地域に対する愛着やまちづくりへの積極的な参加という魅力を知ることができた。しかし、住民が各地域への愛着が強いため、八女市としてまとまった魅力を打ち出すことができておらず、また、各地域以外の人とのつながりが薄いように感じた。そこで住民に地域同士の枠を越えて意識を共有することで、新たな八女市の魅力発見とつながりを作り、まちづくりに活かしてほしいと考える。また、コミュニティーFM局設立に向け、情報技術に触れる機会を作ることで、今後住民自ら情報を発信していくことを目標とする。



今までは地域同士の人とのつながりが薄く、魅力も旧市町村間の中で共有していたため、外部からの八女市の魅力がわかりづらかった。

共通意識を持つことによって地域同士のつながりが生まれ、八女市としての魅力を打ち出しやすくなる。

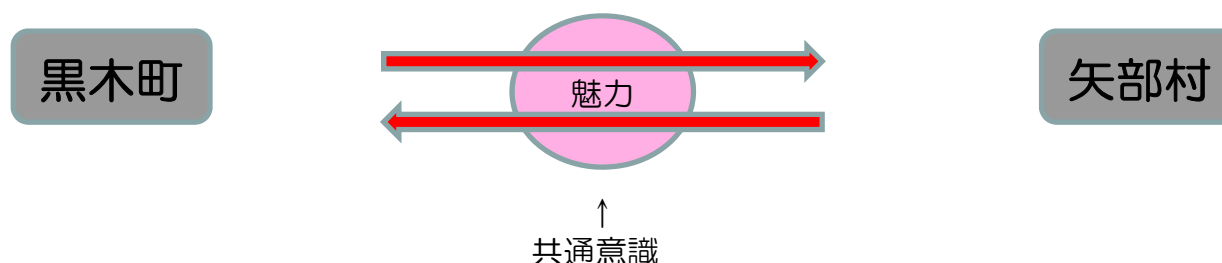
4-2. 情報技術を活用した意識共有方法(案)

- 情報技術を活用した意識共有

- 意識を共有するためには、情報を一方向に発信して終わるのではなく、その情報に対するフィードバックなどを通じてそれに対する双方向の理解を得ることで共通意識が生まれると考える。このプロセスを、私たち「八女市元気プロジェクト」で開設したブログでのラジオやClipCMなどの情報技術を使いながら八女市の住民が参加するワークショップを考案したい。

(ClipCMを使った例)

- ①黒木町の人が矢部村の人に矢部村を案内をしてもらう。
- ②案内してもらった黒木町の方は、矢部村の魅力を発信するCMをClipCMで作ってもらう。
- ③黒木町の方はそれを発表し、矢部村の人からコメントをもらう。



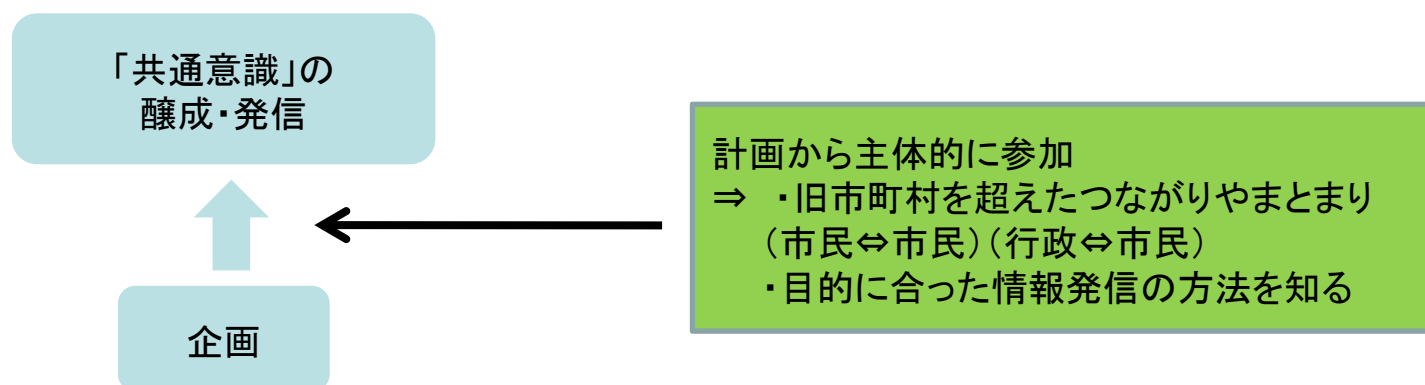
- 期待できる効果

- 住民の新しいつながりを作りや意識共有によって、他の地域を知るきっかけになる。また、新八女市として住民の意識がまとまり、協力関係を築くことにより、新八女市として旧市町村に現在ある魅力を打ち出しやすくなり、今後のまちづくり活動がしやすい状態になる。そして、情報技術を使うことで、情報発信について体験として学ぶことができ、住民が八女市の魅力などの情報を内部や外部に発信する際の基盤作りにつなげることができる。

4-3. 2011年度の目標

● 目標

- ・ 「来年度取り組む『共通意識』の成果を、八女市民の方々が作り上げる」—これを最終目標として活動する。旧市町村を超えて築いたつながりを元に、八女市民の方々がイベントやラジオなどを使った「発信」を計画段階から主体的に参加できるようにしたい。そのために、より市民と市民・行政と市民が結び付き、市全体のまとまりを感じられる場を提供していく。



● 具体的な活動案

- ・ ①八女市全体に共通するキーワードをもとに、来場者に提供・交流するイベントの開催
(例: キーワード「癒し」を元に、お茶を提供したり、音楽を流したり、お線香の販売等をする)
- ・ ②「八女サミット」: 八女の未来について話し合う大会。ラジオなどを使って広く発信する。

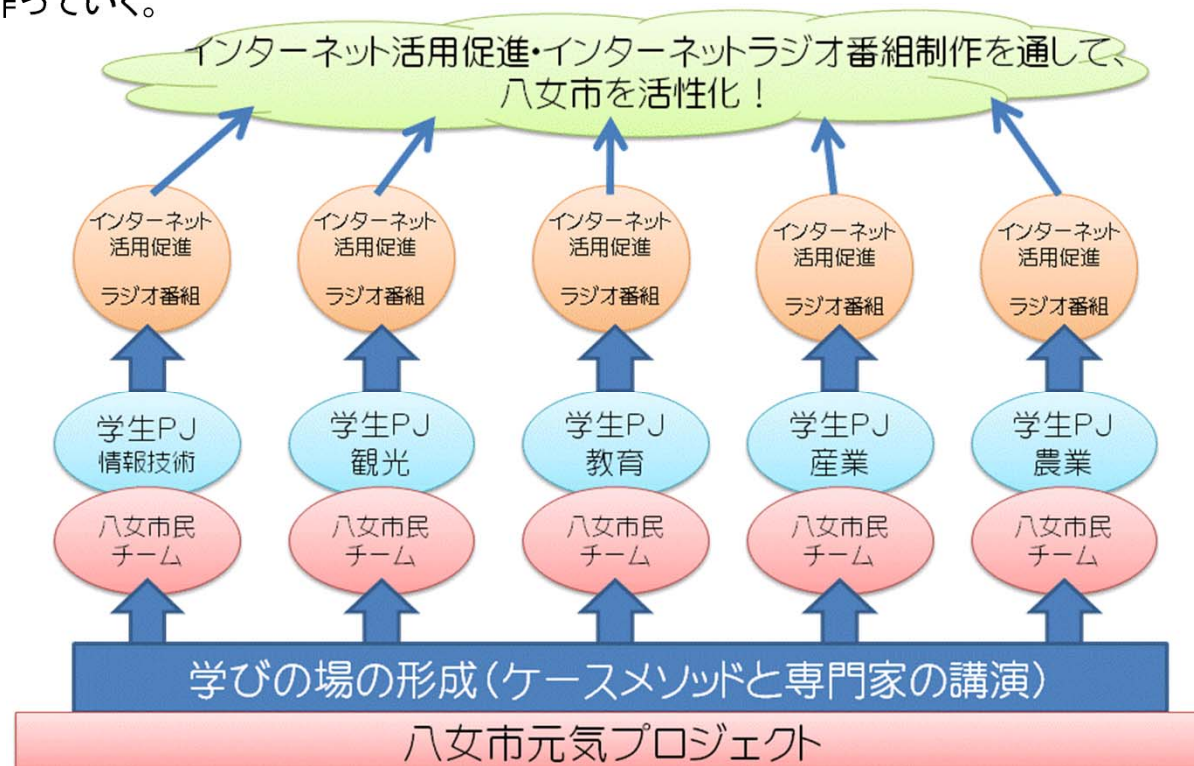
● 期待できる効果

- ・ この取組みを通して、八女市民の方々が旧市町村を超えたつながりを強固なものにできると考えている。そこでできたつながりから、更なる意識共有に発展する可能性があるからだ。また、一つの情報発信について、計画段階から主体的に関わってもらうことにより、目的やコンテンツに合った様々な情報発信の選択を、市民一人一人の方々が自らできるようになり、その後も自由に情報発信ができる状況になるのではないかと考えている。

4-4. 2011年度の体制

プロジェクトのプラットフォーム化

- コミュニティFM立ち上げに向け、市民の方々が主体的に活動する機会と活動を形にしていいため、通信や防災だけではなく、産業や観光、教育など様々な分野において、学生たちと市民の方々が地域の課題解決に取り組むことができる体制を作る。
- そこで、2011年度は、学生メンバーを広く募集し、研究プロジェクト内容で審査して、選抜する。選抜で通った学生プロジェクトは、計画内容を市民の方と実践しながら、インターネットラジオやコミュニティFMの番組を作っていく。



<八女市元気プラットフォームのイメージ>

2010年度八女市元気プロジェクト



平成22年度「八女市元気プロジェクトーコミュニティFMを活用した地域活性化ー」
2010年度提言報告書(2010年度事業成果資料)

平成23年3月

慶應義塾大学飯盛義徳研究室

〒252-0882神奈川県藤沢市遠藤5322-ε 406

E-Mail: isagai@sfc.keio.ac.jp / mizue@sfc.keio.ac.jp

(総責任者:飯盛義徳/総括プロジェクトリーダー西田みづ恵)